

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2018

集める・伝える・活かす

目次

開会のあいさつ	1
報告会	
兵庫県立舞子高等学校	2
国立明石工業高等専門学校D-PR0135° (明石高専防災団) 3年生チーム	5
国立明石工業高等専門学校D-PR0135° (明石高専防災団) 4年生チーム	8
神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ	12
兵庫県立大学「ほっとKOBE」	16
関西大学社会安全学部近藤研究室 チームCREDO	20
関西大学社会安全学部近藤研究室 チームSKH	23
公開サロン	26
閉会のあいさつ	38
チラシ	39
委員・学生名簿	41
発表風景・交流会等	44

災害メモリアルアクション KOBE ACTION2018

「KOBEのことば」

日 時：平成30年1月6日
開会 午前10時00分



開会のあいさつ



牧企画委員長

企画委員長を仰せつかっております京都大学防災研究所の牧と申します。明けましておめでとうございます。阪神・淡路大震災の発生から、今年の1月17日で23周年になります。後2年経ちますと25周年、四半世紀があつた災害から経過することになります。

この災害メモリアルアクションKOBEは、まず震災翌年の1996年の「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」という活動がその出発点です。そのときの活動の目的は、災害対応や復興に関わる方が一堂に会して、自分たちはどうしているのかを共有することで震災10周年の2005年まで続けられてきました。

その後、2006年からの10年間は「災害メモリアルKOBE」という名称での取組みが行われています。災害から10年を経過しますと、この神戸にお住まいの方の中でもその災害を知らない方々が増えてきました。阪神・淡路大震災の教訓をいかに、その若い世代に伝えていくのかということ活動を目的に2015年まで活動が続けられました。そして、震災から20周年を区切り

に2016年からこの「災害メモリアルアクションKOBE」という活動を始めています。

パンフレットの一番上を見ていただきますと、集める・伝える・活かすという言葉が掲げられていますが、震災翌年からの初めの10年がこの「集める」という活動を中心に活動が行われました。震災から10年から20年が先程申し上げましたように「伝える」ということを目的に活動が行われました。そして20年から30年にあたる災害メモリアルアクションKOBEのなかで、私たちが取り組んでいきたいと思っていることは、震災の教訓を「活かす」ということです。教訓を「活かす」場合のキーワードが「KOBEのことば」です。

「KOBEのことば」は、今後10年活動していく上で重要なことになるわけですが、この「KOBEのことば」の「ことば」が平仮名で表記されているのは、単に文字になった言葉や、人が話す言葉ということだけではなく、映像や物など、いろんなものを含め全て「KOBEのことば」ということであると私たちは考えています。

「KOBEのことば」には、様々なケースがあり、発災直後は命を守る、けがをされた方、建物の下敷きになられた方をどう助けるのかということもあります。その後、避難所での生活の大変な経験や災害からの復興もこの「KOBEのことば」の一つだと思っています。

この災害からの復興については、今回の発表の中でも兵庫県立大学の「ほっとKOBE」の活動がございましたが、この地域にはたくさん災害復興公営住宅があります。その中で20年経ってまだまだ災害からの復興に大変な御苦労されている方々もおみえになり、まだまだ全てが完了したわけではございません。「KOBEのことば」を活かすことが今回のテーマですが、この活かすことは、とても難しく、この活動をしている原点になっています。阪神・淡路大震災の後もたくさん災害が発生して、伝えることがどれほど重要なのか、これをどのようにすれば本当に伝わるのか、皆さんとほかの地域の方に伝わって実践していくのかということがとても重要な課題だと思って活動しております。

今回発表いただくのは若い世代の方々ですが、いろいろ伝える活動をする中で悩んでいることもなかなか伝わらないなどという、思いを持っておられることを聞いて非常に感銘を受けています。今回、後半の公開サロンで、実際に「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」というテーマでどうすれば伝わって、「KOBEのことば」が活かされていくのかについて、議論していきたいと考えております。皆さんと一緒にこの「KOBEのことば」をどう伝えるようにしていくのかを考えさせていただきたいと思っております。

本日はよろしくお願いたします。



災害メモリアルアクションKOBÉ

兵庫県立舞子高等学校

目的：災害時、その人にとって
ベストな選択をとって後悔しないほしい



身近とは？

今年アウトプットの目標を「災害は身近にあることを知ってもらう」と決めました。生き抜くためには、身近に感じる必要があるだと思っただけです。チーム内で何度も話し合いを重ねましたが、意見がまとまらず悩みました。様々な意見が出ましたが、私たちの中の身近は、いつか絶対に発生する災害についてずっと考えることではなく、「ふとした瞬間に思い出すこと」とであると定義しています。

兵庫県立舞子高等学校の紹介

昨年度に引き続き、今年度も各学年の環境防災科の生徒11名が参加させていただいています。災害を身近にするにはどうすればいいのだろうと活動してきました。

アウトプット in南あわじ市

インプット

1、「語り継ぐ」

震災を経験した身近な人から聞いた話を高校生が文章にした舞子高校独自の冊子を読み、まとめました。

2、ヒアリング

9/26と10/10に2人の教員の方を対象にヒアリングを行いました。災害時に学校として取るべき対応を教えてください、ご自身が災害を身近に感じる瞬間について教えてくださいました。また、災害を身近に感じてもらうには興味を持ってもらったり、些細なことに疑問を持ってもらったりする必要があることなどを聞きました。



松帆小学校

(授業内容)

- 1 学校紹介
- 2 防災〇×クイズ
→阪神・淡路大震災の時のことや非常用持ち出し袋に入れるもの、津波は一度来たらもう来ない？などの問題を出しました。
- 3 津波について
→津波のメカニズムを模型を使って説明したり、津波に関するクイズをしました。

西淡志知小学校

(授業内容)

- 1 学校紹介
- 2 阪神・淡路大震災について
→自助・共助・公助について説明しました。
- 3 災害について
→災害とは何か、とるべき対応はどんなものか紹介しました。
- 4 防災〇×クイズ

反省

～インプット～

- ・もう少し早く行えれば後のことを考える時間ができた。
- ・インタビューの時スムーズに
- ・インプットの量、考え方

～アウトプット～

- ・準備・知識不足
- ・時間が余った
- ・問題が被った
→伝わったことの確認になった
- ・言葉遣いと言ひ返し

～全体・まとめ～

- ・共通の認識ができていなかった
→情報共有の方法を見直す
- ・効率よく→時間と仕事の割り振り
- ・計画性→スケジュール管理

○**兵庫県立舞子高校1** 皆さん、おはようございます。舞子高校です。今から災害メモリアルアクションKOBEの最終報告会の報告をさせていただきます。今日は6名で発表を行いたいと思います。

まず、舞子チームの目的は活動一年目の当初から取り組んでいる、「災害時、その人にとって後悔しないように最善の選択をとってほしい」です。これは最初、生き抜いてほしいとなっていたのですが、災害時、身近な人や大切な人が目の前で亡くなってしまったら後悔してしまうと思うので、最善の選択をとってほしいとしています。

簡単に今までの振り返りをしたいと思います。2016年、2017年はアウトプットの目標として、きっかけづくり
に焦点を当てていったのですが、今年は「身近」に焦点を置きました。私たちが身近って何だろうと考えたときに、自分の身に何らかの影響を与えたときや日常のリスクを考えられる、また具体的な知識を持っているなど、自分と関係あるとなったときでした。

しかし、定義ができず、自分たちでは身近って何なんやろうという最終結論が出なくて、そこでヒアリングや「語り継ぐ」から身近なポイントを探すことにしました。

○**兵庫県立舞子高校2** 今年のインプット1です。今年はヒアリング調査と「語り継ぐ」を読むことを行いました。

まず、ヒアリング調査についてです。ヒアリング調査では、神戸市立上野中学校で社会科の教諭をなされていて、私の父である立野亮先生に話を聞きました。立野先生は阪神・淡路大震災の際は奈良県に住んでいて、その3カ月後から神戸市内の中学校で勤務されています。質問は先程も述べました「身近」ということを中心に、どのようなときに災害を身近に感じるかや東日本大震災や熊本地震の発生を受けてどのようなことを感じたかについて質問しました。

災害を身近に感じるのは、やはり災害が実際に近くで起きたり、東日本大震災については東北で津波が来ると

いうイメージがあったが、それはリアス式海岸のあたりという印象が強く、仙台平野や茨城県まで津波が来たことや、やはり福島第一原発の事故と回答を得ることができました。また、実際に自分で何か身近に対策していることはあるかという質問に対しては、例えば家に水の備蓄を置いておいたり、旅行に出かけたのであれば旅行先で高いビルを探したり、非常口を探すようにしているという回答を得ることができました。

この幾つかの反省点は、もっと多く質問していればよかった。もっと質問するとき、はきはきと話せばよかったという意見が挙がりました。

○**兵庫県立舞子高校3** 次に井口先生に質問しました。井口先生は僕の中学校の母校で地学を主にしている理科の先生です。

毎年1月17日が近づくと、防災教育の一環として授業の中で阪神・淡路大震災当時の自分の経験を語ってくれます。当初私たちはアウトプットとして、災害を身近に感じてもらうことを目標にしていました。しかし、自分たちが災害を身近に感じていないところから、改めて井口先生に話を聞くことになりました。

井口先生が防災を学ぶ上で一番大切にしてほしいことは、地域とのコミュニケーションです。なぜなら、地域のコミュニケーションは災害が起こったときに自分たちがほかの人たちの命を助けることに繋がるからです。

○**兵庫県立舞子高校4** 次に「語り継ぐ」を読み、インプットを行いました。「語り継ぐ」とは、阪神淡路大震災を伝えていくために卒業制作として震災を経験した保護者などから当時のお話を聞き、それを自分たちの言葉で文章にして一冊の冊子にしたものです。今回はその中でも、1期生から10期生の作品の中からピックアップされて一冊の冊子にまとめられた語り継ぐアンソロジーと、私たちのメンバーの中で尊敬する先輩が11期生にいたので、11期生の作品も読ませていただきました。



そして、その感想と身近に感じたポイントをそれぞれ書き出しました。このほかにも全員が共通して感じたことは、言葉では分かっているにもかかわらず震災が起こったことを信じるのは難しいなということです。

そして、「語り継ぐ」などのインプットを終え、身近について気づいたことがありました。身近とは災害、災害と頭の中で日常的に考えるのではなく、ふとしたときに気づいて行動することではないかということです。これはどういうことかということ、例えば海に遊びに行ったときにここで地震が起きたらどうしよう、どのような行動をしよう、ふとしたときに考えるということです。

これらのインプットへ反省を出し合いました。身近に感じるポイントが少なかったこと、インプットを行う予定をしていたより遅く始めてしまったこと、去年に比べてインタビューがスムーズに行えなかったことが挙げられました。

○**兵庫県立舞子高校5** 今年のアウトプットは出前授業として、南あわじ市の西淡志知小学校と松帆小学校を訪問しました。南あわじ市の西淡志知小学校では、舞子高校の紹介、阪神・淡路大震災の紹介、災害についての説明、防災クイズを行いました。阪神・淡路大震災の紹介では、阪神・淡路大震災を知っていますかという質問から概要を話しました。倒壊した高速道路の写真を見てもらってから、自助・共助・公助の大切さと防災の大切さを伝えました。また、阪神・淡路大震災では自助が一番多かったことも伝えました。ただ、話を聞いてもらって一方通行の話をするだけでなく、キャッチボールをするようにして身近に感じてもらえるように先に質問してから答えを言っていくようにしました。

災害についての説明は、地震以外などの災害についても説明しました。この災害のときにはどんな行動をしたらいいのか、どんな対策をとったらよいかなどを教えました。

防災クイズは、○×クイズ形式で手を挙げてもらう形で行いました。クイズは5問出題し、内容は阪神・淡路大震災の概要、非常持ち出し袋、津波についてのクイズを出題しました。防災クイズの後に非常持ち出し袋の話もしました。非常持ち出し袋の中にどんなものを入れたらよいですかという質問の後に、具体的な例としてラップや携帯トイレの便利さを教えました。

○**兵庫県立舞子高校6** 松帆小学校では舞子高校の紹介、防災クイズ、津波の説明、避難行動の説明をしました。津波の説明ではクイズ、ビニールシート、模型を使って説明しました。クイズは日本に影響をもたらす4つのプレートがクイズ形式で発表しました。ビニールシート

は波の高さを表現して、より身近に感じてもらうために使用しました。去年も使っていて、今年は南海トラフ巨大地震で南あわじ市に来ると予想されている波の高さを表現しました。模型はプレートの仕組みがわかるものを使用しました。

出前授業の反省では準備不足と知識不足が挙げられました。準備不足は、舞子高校では期末テストがあって、もっと早くから準備していれば余裕を持って出前授業が行えたと思いました。知識不足では、質疑応答のときに僕たちでは答えられない質問が出てきて、結局先生に答えてもらいました。素朴な質問にもしっかりと答えられるようにもっと勉強しなければならないと思いました。

全体の反省では、主に二つあって、一つは個人のスケジュール管理です。この日は集まると前から決めていたのに、その日に予定を入れてしまい、集合状況が悪くなってしまうことがたくさんありました。来年度はしっかりと個人のスケジュール管理をします。もう一つは、チーム全体で協力することです。ふだんのミーティングで大半の人はメモリアルアクションのミーティングをしているのですが、何人かの人が別のことや別の話をして共有が遅くなることがありました。チーム全体で協力すれば、早く効率よく進められるのではないかと思いました。来年度は個人個人のスケジュール管理をしっかりと、チーム全体で協力して活動していきます。

御清聴ありがとうございました。



国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°(明石高専防災団)3年生チーム



東二見地区減災プロジェクト

東二見地区減災プロジェクト

明石高専 D-PRO135°
明石高専 D-PRO135°

昨年度からの活動変化

昨年度からの活動変化

D-PRO135°、明石高専建築会、ボランティアクラブ東二見との連携	⇔	D-PRO135°がほぼ単独
活動地域の拡大 … 西之町	⇔	西之町、北野町、仲之町、地藏町、東野町
イベントの変化 … まち歩き、防災イベント	⇔	感震ブレイカー、ヒアリング
		より要援護者に寄り添った活動へ

感震ブレイカーの設置

感震ブレイカーの設置

感震ブレイカーとは？

阪神淡路大震災、東日本大震災、どちらの震災でも原因が特定できた火災の約6割を占めるのは電気関係の出火、特にその大半を占めるのが通電火災でした。

阪神淡路大震災では神戸市内で157件の建物火災が発生し、原因が特定できたのは55件で、そのうち35件が電気火災と最も多く、そのうち33件が通電火災だったそうです。

経済産業省では、電気火災対策には、感震ブレイカーが効果的として普及啓発がされています。



東二見地区での設置

東二見地区は古い住宅が密集しており火災の危険性がさらに高い上、高齢者の方も非常に多いため、将来的にはできるだけ多くの多くの家での設置を目指し活動を進めています。

現在は自治会や民生委員と協力し、要援護者の方を中心に仲之町で5軒、地藏町で40軒の設置が完了しています。

今後の活動展開

今後の活動展開

防災イベントの多数開催

防災訓練

防災グッズのレクチャー

ダンボールベッドや非常食などの体験

炊き出し(地域の婦人会と協力)

震災体験者の方の知識の周知拡大

⇔

いざ災害時に要援護者を助けるということにプレッシャーを感じさせないようにするため、

前年度よりアクティブな要援護者を含めた地域のコミュニティを強くする。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 3年生

おはようございます。D-PRO135° 明石高専防災団二期生の竹谷です。今日よろしくお願いします。

私たちは2016年度から明石市東二見地区で減災まちづくりを行っています。最初に東二見地区について紹介させていただきたいと思います。東二見地区は明石市西部の海沿いに位置しています。昔ながらの古い町並みが多く残っている漁師町です。もちろん現役の漁師の方もたくさんいらっしゃいます。また、75歳以上の高齢者や体の不自由な方などの要援護者が多く住んでいます。また海拔2メートル以下の地域もあり、南海トラフ地震などの海溝型地震の際の津波での被害が考えられます。

私たちは2016年度からこの活動を行っているのですが、前年度から少し活動体制が変化しました。まず、活動する地域が変わりました。前年度は東二見地区の西之町のみでの活動だったのですが、前年度の活動に興味を持ってくださった仲之町、地蔵町、北之町、東之町、そして西之町を含めた自治会の会長の方が興味を持ってくださり、本年度は広い範囲での活動となりました。

また前年度は、まち歩きや防災イベントといった自治会や地域のボランティアクラブのコミュニティー全体の防災に取り組んでいましたが、今年度は一軒、一軒に感震ブレイカーと呼ばれる防災器具をつけたり、ヒアリングを行う活動が多くなりました。また、前年度はD-PRO135° と西之町自治会、明石高専建築会の方の共同体での取り組みをしていたのですが、今年度はD-PRO135° が中心となり、自治会をサポートしていく形でのまちづくりを行ってきました。このように広い地域になった分、一軒、一軒の家庭や一人一人と寄り添って向き合うような防災に取り組まれました。

今回のメインの活動になる感震ブレイカーの説明をさせていただきます。感震ブレイカーとは、地震時の停電、その後の送電再開によって電源が入った電熱器具が原因の火災、通電火災を防止する器具です。

通電火災の仕組みを説明いたします。通電火災とは、まず地震が起き、停電になりその後、電力会社の方が点検などを行うことによって、また送電が再開されます。そのときにストーブやこたつなどの電熱線の入った暖房器具などが原因で火災が起こってしまいます。この火災を通電火災と呼んでいます。

今回この感震ブレイカーを、西之町に1軒、仲之町に5軒、地蔵町に24軒、計30軒の取り付けが今年度完了しました。2018年1月には、さらに地蔵町17軒に取り付けを予定しています。

また、感震ブレイカーの取り付けを行った際にヒアリングも行いました。津波はもちろん、大型台風の際は高波や浸水の被害もあると聞いたとき、津波のことは予想していたのですが、大型台風で実際に浸水している事実は私たちも知りませんでした。漁師町でするので実際の漁師の方もいらっしゃって、船などを所有している方いるので人一倍水害には敏感になっていると思いました。また、このように感じて意識はしているのですが、災害時に75歳以上の高齢者の方や体の不自由な方もいらっしゃるの一人で避難することが難しく、実際に災害が起きたときでも、それを行動に移せないと考えている方が多いことに気づきました。そこで私たちは高齢者や要援護者の避難を街全体でサポートできるコミュニティーづくりが必要だと考えました。

それから2018年3月25日に東二見の防災イベントを開催することを決めました。狙いは、要援護者とその近隣住民のコミュニケーションをとる場をつくることによって、災害時の避難をサポートできるコミュニティーづくりをすることです。避難訓練や消火訓練、またこの避難訓練の際は、近隣住民と要援護者の方が一緒に訓練できるような仕掛けをしたいと考えています。また、地元の方からのアイデアで、地元の水産物を使った炊き出しを考えています。この東二見地区ではタコがとて有名でタコやほかに魚などを使った炊き出しを考えていま



す。また、災害時に使う器具の体験や段ボールベッドの手づくり体験をすることで人を呼び込めるイベントにしたいと考えています。

またさらに2018年6月頃には、防災バスツアーを考えています。人と防災未来センターや長田区駒ケ林地区の防災まちづくりの様子を見学することで、防災に対する関心を高め、地域内でコミュニケーションをとる場になればいいなと考えています。また、感震ブレーカーの

取り付けも並行して行おうと思っています。地蔵町の残り17軒への取り付けは、地蔵町に取り付けをしに行った際にブレーカーの形状や大きさによって取り付けられなかったお宅がたくさんありましたので、対策を考えていきたいと思っています。また、東之町や北之町の要援護者のお宅へは未着手なので、希望者を募って取り付けをしていきたいと考えています。

御清聴ありがとうございました。

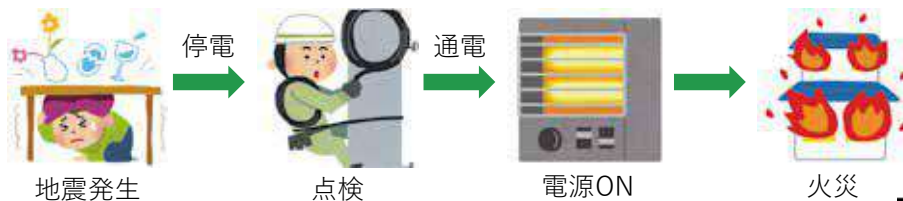
感震ブレーカー

感震ブレーカーとは？

地震時の停電、送電再開によって電源が入った電熱器具が原因の火災(通電火災)を防止する器具。



通電火災のしくみ



D-PRO135^o
明石高専防災団



【感震ブレーカー取り付け】

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135°(明石高専防災団)4年生チーム



D-PRO135°

明石高専防災団

私たちの活動

About D-PRO135°

2015年夏、明石高専の学生たちによって防災組織 D-PRO135°(明石高専防災団)が誕生しました。1年生での必修科目「防災リテラシー」にて、防災士資格を取得した学生たちの有志が集い、「防災知識の普及や学内での防災意識の向上に貢献したい」という思いで様々な活動に取り組んでいます。現在メンバー 20人(4年生チーム 13人)。

避難所運営ゲームチャレンジ!

ゲームの概要

About the Game

災害が発生し、自分たちの学校が避難所になったとき、仲間どのように避難所を運営するのか。避難所運営について仲間と相談しながら考える、シミュレーションゲームです。元来、避難所の設置・運営を想定するゲームはいくつか存在しましたが、プレイは有料で地域性がなく、リアリティに欠けるという欠点がありました。それらの諸問題を解決するため、実際にある施設とそこを利用する人々を対象に、ローカルな目線でゲーム作りに挑戦しました。また、非常時に大切な臨機応変性や現場対応力も試されるゲームとなっています。

発案：太田敏一先生 協力：鳥居宣之先生(神戸高専)

ゲームの実施方法

How to Play the Game

避難所の設置とハプニングの発生という2つのパートで構成されます。事前に避難所の知識を得ておくことが前提となっています。

パートI：避難所の設置

避難所内の配置、避難所での役割分担やルールなどを考える。

パートII：ハプニングの発生

避難所で様々なハプニングが発生する。パートIでハプニングについて対策を考えていたらポイントを獲得できる。模範解答ではなかった場合、チャレンジすることができる。

チャレンジ

模範回答ではなくても、適切な対応だとポイントを獲得できる。柔軟な思考が求められる。

神戸高専におけるゲーム実施例

The event in KCCT

神戸高専3年生250名を対象とし、2日間にわたって実施しました。1日目は阪神淡路大震災の被災者の方から実際に話を聞き、避難所の様子について学びました。2日目には神戸高専で避難所を運営することを想定し、1日目に学んだ知識を用いて次々に起こるハプニングに対応しました。体験した学生からは「防災や避難所運営に興味を持つきっかけになった」「災害時、避難所を運営する側にまわりたいと感じた」といった感想をいただきました。



1日目の様子



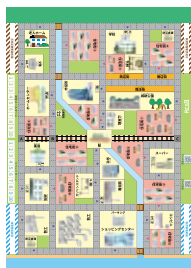
2日目の様子

防災ボードゲーム RESQ

RESQとは

What is RESQ?

私たちは一昨年から遊びながら防災を学べるボードゲームを作成してきました。RESQは昨年完成した「共助」を主体とした防災ボードゲームです。HPにて無料でデータを公開していますので、誰でもダウンロードすることができます。ぜひ各家庭で印刷して、遊んでみてください!



体験イベント

Experiential Event

昨年のRESQ完成以降、たくさんのメディアに取り上げていただきました。また、多くの団体からお問い合わせをいただき、地域のイベントに参加してRESQの体験会を実施しました。様々な年代の方に防災について興味を持っていただくきっかけになりました。



B-1グランプリ in Akashi



真陽地区 RESQ 体験会

HP

過去の活動や防災ゲームの詳細はHPに掲載しています。興味のある方はぜひご覧ください。RESQデータダウンロードはこちらどうぞ。



<https://D-PRO135.github.io/home/>



SNS

最新情報・お問い合わせはこちら!



@135_d_pro



@d.pro135.e



○国立明石工業高等専門学校D-PRO135°（明石高専防災団）4年生チーム おはようございます。D-PRO135°

4年生チームの渡部桂太朗です。本日はよろしくお願ひします。

私たちD-PRO135°は明石高専の防災士の学生が発足した防災組織です。発足から現在まで大きく分けて2つの世代に対して活動を行ってきました。一つ目が高齢者、もう一つが子供です。高齢者の方々に対しては、3年生チームが減災まちづくりの活動を行い、そして子供に対しては、4年生チームが活動を行いました。

それではこの活動について詳しくお話していきます。楽しみながら防災を学べないかというコンセプトのもと、一年前に防災ゲームRESQを開発しました。RESQにはこれらの特徴があります。昨年度からさまざまな地域の子供たちに対し、RESQを使った防災教育を行ってきました。今から今年の活動の様子を二つほど御紹介します。

まず一つ目の舞台は11月に明石で行われたB1グランプリの会場です。ここでは、会場のイベントブースで全国各地から来た子供たちにRESQで防災を学んでもらいました。

そして二つ目の舞台は、新長田の真陽地区です。ここでは地元の小学生にRESQで遊んでもらいました。楽しく防災を学んでもらえたと思います。今後もRESQを使い、諸地域で活動していけたらと思います。子供世代に対する活動の紹介は以上です。

このように今まで私たちは2つの世代に対して活動を行ってきました。そして、今年度は新たにもう一つの世代に対しても活動を行いました。それは私たちと同世代に対してです。それでは次に同世代に対して行った活動についてお話していきます。

同世代とは具体的に神戸高専の3年生で、明石高専の学生が神戸高専の学生に対して活動を行いました。どのような活動かと申しますと、2日間の防災授業を企画、運営するといったものです。ここで少し神戸高専の防災教育について御紹介します。

神戸高専には2年前から防災・減災入門という授業があり、1、2年生で座学を行ってきました。そして今年度初めて3年生の授業が始まります。この3年生の授業というのは授業内容もまだ決まっておらず、太田先生や神戸高専の先生と相談して決めていきました。そして、避難所運営ゲームを通して避難所運営を疑似体験するといった授業内容に決まりました。避難所運営ゲームは世の中に既に存在しています。そこで当初は既存のゲームの利用を考えました。

しかしながら、その既存の避難所運営ゲームには問題

点が存在しました。そこで既存のゲームの利用は断念して、私たちが授業のためだけに新しい避難所運営ゲームを作りました。それが避難所運営ゲーム「チャレンジ!」です。これは太田先生や神戸高専の先生と協力して製作しました。このゲームは先程の問題点を全てクリアしています。ゲームの詳細については今から授業の様子と並行して御紹介していきます。

授業は9月25日、26日の2日間行われました。場所は神戸高専です。まず、1日目について御説明します。1日目はゲームは行わず、避難所運営についての知識を深めていきました。阪神・淡路大震災のときに避難所で様々な立場で活動された4人の方々をお招きし、それぞれの被災体験談をお話いただきました。これにより学生は避難所運営の知識を深めていきました。

そして2日目は1日目に聞いたお話を活用して、避難所運営ゲーム「チャレンジ!」を行いました。学生は体育館に集まり、10人ごとのチームに分けられました。またチームごとに神戸高専の校内地図、ペン、ポストイット、紙などが配られました。簡単なアイスブレイクの後、ゲームがスタートします。ゲームは2つのステージに分けられます。まず、第1ステージが始まります。司会の太田先生から大地震が発生したことが告げられ、ゲームはこの状況下でスタートします。この状況を踏まえ、学生たちは避難所の設置を行っていきます。そして第1ステージでは避難所設置に関する質問が与えられ、チーム全員で回答を考えます。全7題あるうちの2題は、上のほうは特別な配慮を行う部屋を考へ、そして下のほうは避難所でのルールを考へろといったものです。この与えられた質問に対し、学生たちは自分たちの班で回答を考へていきます。もちろん、正解というものはないのでチームで議論して自分たちの意見をまとめていきます。このようにして第1ステージで避難所の設置を行っていきます。



そして第1ステージが終わると、第2ステージが始まります。第2ステージでは避難所が開設し、様々な問題が発生していきます。またチームごとに点数を競い合っていくのもこの第2ステージです。司会の太田先生から、避難所にハプニングが起こったことが告げられます。これに対して第1ステージでこのような意見を事前にまとめていったとします。上の特別な配慮を行う部屋を考えるとといったものにはペットを預かる場所をつくっておく、下の避難所でのルールをつくれといった質問に対しては、ペットは体育館には連れ込まないというルールを考えていたとします。すると、この意見を考えていた班は10点獲得できます。このようにして第1ステージで考えていた意見が第2ステージで反映されていきます。このようにして得点を稼いでいきます。

しかしながら、先程のような模範解答を必ずしも準備しているとは限りません。そこで登場するのが「チャレンジ!」というルールです。

それではこの「チャレンジ!」というルールについて御説明します。例えば、第1ステージの特別な配慮を行う部屋を考えるといった質問に対し、このような意見を考えていたとします。屋内・屋外の両方に子供が遊ぶための場所を確保し、遊ぶためのツールも充実させると、このような意見を考えていた班があるとします。それでこのような意見は先程の模範解答には沿っていません。しかしながら、これを考えた班は「チャレンジ!」というルールを駆使して、ゲームマスターに対して物申します。

「すみません、私たちの班はこのような意見を考えました。そしてこの遊ぶためにツールという中にペットも含まれていました。避難者が連れてきたペットをここで子供と一緒に遊ばせるつもりでした。」というふうに物申すわけです。それを聞いたゲームマスターは、その発言に見合った点数をそのチームに与えます。このようにし

て「チャレンジ!」というルールでも点数が稼げます。一見、理屈をこじつけるようなルールにも聞こえますが、この臨機応変な発想を行うことによって被災したときの柔軟な対応の重要性が学べます。このようにしてこのルールがゲームによりリアリティを加えています。以上がゲームの大まかな流れです。

また、このゲームではハプニングとその対応について被災体験者の解説が加わります。それによってより学習が深まっていきます。学生は点数を競い合いながら多くのことを学べたようです。

このように2日間の授業の中で多くのことを学んでもらえたようです。

神戸高专での活動の紹介は以上ですが、最後に避難所運営ゲーム「チャレンジ!」の広がりについて御紹介します。このゲームは神戸高专の授業のために開発しました。しかしながら、既にほかの地域でも実践されています。実践は人と防災未来センターの本塚主任研究員によって行われました。それでは、最後に二つほど実践例を御紹介します。一つ目は、篠山市立大山小学校、大山幼稚園の教職員に対して災害対応マニュアルの見直しを目的に実践しました。二つ目は、広島市において防災士養成講座の受講生、つまり未来の防災士に対して学習目的で実践しました。今後もこのようなより大きな場所で「チャレンジ!」を実践できればと思います。

このように私たちD-PRO135°の活動はこの3つの世代だけでなく、さらに幅広い世代に広がりつつあります。今後はより幅広く防災活動を行っていきたいです。以上で発表は終わります。

御清聴ありがとうございました。





【交流事業】



RESQ



<https://D-PRO135.github.io/home/>

神戸学院大学 現代社会学部

社会防災学科安富ゼミ



災害メモリアルアクションKOBЕ 2018 「阪神・淡路大震災の教訓って？」

神戸学院大学・現代社会学部・社会防災学科・安富ゼミ

すずかけ台小防災キャンプ

7月30日と31日に三田市立すずかけ台小学校で防災キャンプを行いました。体育館に避難所での生活と同じようにダンボールで寝たり非常食を食べたりしました。ダンボールでのベットの作り方、非常持ち出し袋、新聞紙でのスリッパ作りをし、避難所での体験をして小中学生たちに、このキャンプに参加して何を学べたかのアンケートをしました。非常持ち出し袋では、非常食、飲料水、ラジオ、救急セット、懐中電灯が多かったようです。タオル、雨具、軍手、ビニール袋やラップもありました。



街頭インタビュー

地域によって震災への意識、教訓の違いがあるのかを調べるため、11月22日に神戸市営地下鉄西神中央駅付近で、11月26日は阪神芦屋駅前、12月1日には三宮のセンター街とポートアイランドのダイエー前の4地区に分かれ街頭インタビューを行いました。計59人にインタビューを実施し、家具の固定をしているかや、次世代に伝えたいことなどを聞きました。家具の固定をしている人は多く、いつでも逃げられるようベッドの近くにスリッパを置いておくなど、震災の体験が役に立っていることが伺えました。



学内アンケート

11月3日の人と防災未来センターでの中間発表の際、私たち世代の考える教訓とは何か?の問いから神戸学院大学の現代社会学部、法学部、経済学部、経営学部、グローバルコミュニケーション学部の一年次生を中心にアンケートを実施、510人から回答を得ました。アンケートの内容は①家具の固定をしているか②現在住んでいる所の避難所を知っていますか③大学で防災の授業を受けたことがあるか④阪神淡路大震災の教訓は何か——などを聞くことができました。家具の固定をしている人は5人に1人と少なく、大学で防災の授業を受けたことある人となない人の差があまりないことがわかり、軽くショックを受けました。

家具の固定をしているか



ラジオ出演・新聞掲載

11月28日と12月19日の2回、ラジオ関西の「時間です!林編集長」に向田健司、井上太賀、塚本真央子、富岡美祈の三年次生4人が出演。「災害メモリアルアクションKOBЕ2018」への取り組みについて話しました。他にも私たち自身が考える阪神淡路大震災の教訓とか何かを話し、ラジオのリスナーに聞いていただいた。日頃から阪神淡路大震災について考えたり、思い出したりすることがない人達が震災について考え直すきっかけになったりしたらいいな、と思いました。

また、12月1日のポアインタビューでは、産経、神戸新聞の取材を受け、翌日の紙面に掲載されました。



神戸学院大学
ポートアイランドキャンパス

〒650-8586
兵庫県神戸市中央区港島1-1-3

TEL : 078 (974) 1551

メンバー紹介

教授 安富 信
3年 和田 貴士 菅原 由衣 富岡 美祈 塚本 真央子 大家 元希
井上 太賀 南木 颯人 向田 健司 仲上 芽花 山村 勇貴
2年 長井 裕貴 寺井 美紀 林 修功 川口 祐生 東 萌菜美
森脇 稔喜 森 達也 巽 翔 岡崎 琳太郎 寺尾 莉子
池内 麻菜美 土居 大輝 池上 ひなの

○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ1

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミの発表を始めます。「阪神・淡路大震災の教訓って？」をテーマに活動してきました。

昨年度の活動については、震災で被災した世代の方が、私たち「未災者」世代に数多くの教訓を伝えてくれます。しかし、その教訓と私たちが関わっているワークショップに参加している小さな子供たちが思う教訓との間には、どこかズレがあるのではないかという疑問を持ったことが活動のきっかけです。教訓のズレは本当にあるのか、ズレをなくすためには何が必要なのか、震災を本当の意味で知らない私たちがさらに年下の世代に何を伝えればいいのか、などを正しく知るために被災体験世代と未災世代の両方を対象に聞き取り調査を実施しました。

昨年度の活動では、「教訓って伝わるの？」の喧嘩からスタートし、中学校へインタビュー・アンケート調査を行い、中学生の率直な震災に対するイメージ・教訓がどのように伝わっているのかを確認しました。街頭インタビューでは、阪神・淡路大震災で被災し、復興に携わった方に直接お話を聞くという利点を生かし、新長田と灘区の水道筋で行いました。ラジオ関西「時間です！林編集長」にも出演し、ラジオを聞いたリスナーさんからたくさん情報をいただきました。

昨年度のまとめは、主に現状把握のための調査を中心に活動し、継続的な調査の必要性を再確認しました。教訓は正しく未災世代に伝わっていたのか？ではノーと言わざるを得ない状況でした。震災イコール大変のイメージが強く、若い世代に教訓は正しく伝わっていないことが判明し、これを踏まえて活動することが必要です。

今年度の活動目標は、前年度の活動を踏襲して、さらなる現状調査や教訓の収集を行う。未災世代に防災知

識を正確に、また効果的に伝える方法は何かを見つけ出す。私たちの在籍する大学の中でも調査を行い、より身近な集団の現状を知る。昨年の活動の反省点は、「活動の大部分が聞き取り調査であった」というところを改善し、調査結果を利用した実践的な活動を行います。

○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ2

続いて、今年度の活動の内容について説明させていただきます。昨年度の活動に引き続き、三田市立すずかけ台小学校での防災キャンプへの運営としての参加と、対象地域を増やしての街頭インタビュー。本年度から新たに自分たちの身近なところでの防災意識を調査することで、大学内での防災意識調査アンケートなどを行ってきました。

まず、すずかけ台小学校で行われました防災キャンプにおいて、2年生、3年生の代表者の十二、三名が参加しまして、運営の手伝い、防災クイズなどを実施して子供たちと交流を深めました。段ボールベッドの組み立てを子供たちと一緒にしたり、〇×クイズを行いました。〇×クイズは〇と×の簡単な防災のクイズになります。答え方は手を挙げてもらうということも考えたのですが、〇×で左右に分かれてもらう形でなるべく体を動かしてクイズに参加してもらうことを考えました。また、緊急地震速報の音も実際に流し、この音が流れたときにどういった対応をとればいいのかについても質問して実際に頭を守る、机の下に隠れる動作を実際にやってもらいながら学んでもらいました。

防災キャンプに参加された子供たちに対して、後程アンケートを行いました。その回答の一部で、やはり〇×クイズについてよく覚えているという子供たちが多数いることがわかりました。体を動かして学ぶことによって防災に対する興味が記憶に残るのではないかなということがわかりました。



昨年度の防災キャンプでは、災害伝言ダイヤルを神戸学院大学でブースをつくって説明をしましたが、感想の中に本年度は実施していなかったため、災害伝言ダイヤルについて学びたかったという意見がありました。子供たちは実際に去年やったことを覚えてくれていることがわかり、防災についてもう少し知りたいと思っているのかなと捉えることができました。

防災キャンプのアンケートについての反省点は、当初5年生、6年生、高学年にアンケートをとるつもりで少し難しい内容でアンケートをつくっていたのですが、急遽人数の関係で全体にとることになったので1年生、2年生、低学年には難しい内容になってしまったことが大きな反省点です。

続いて、身近な大学生に一度アンケートをとってみようということで、神戸学院大学のポートアイランドキャンパスにある学部と学科を中心に510名からアンケートをとりました。家具固定や、震災の教訓について幾つか質問しました。家具の固定をしているかどうかについて、510人中403名が家具の固定をしていないという回答が出ました。家具の固定をしているのは21%になり、これは内閣府が発表しているデータの約半分であることがわかりました。その中で実家やひとり暮らしであるということで分類してみると家具の固定をしているのは91%が実家に住んでいることがわかりました。なかなかひとり暮らしでは家具の固定はできないことがわかりました。

続いて、街頭インタビューです。昨年度は灘区水道筋と新長田、特に震災のときに被害が大きかった地域へのインタビューを実施しました。今年度は震災の後に移り住んだ人が多い西神中央や、ポートアイランドでも行いました。インタビューの内容については、大学内で行ったアンケートと近いものを幾つか質問しました。また、高齢の方、実際に震災を経験された方にも話を伺うこと

ができたので、その当時の震災の体験談や、教訓について思うことは何ですか、伝えたいことは何ですかということについて聞きました。特に震災を経験した人だからこそわかる食糧の備蓄や、家具の固定をすることについて聞くことができました。ただ、複数の方から震災の後、数年は家具の固定や、備蓄について関心があった実際にやっていたけれども、最近はできていないということで実際に災害を経験した人でも時間が経てば、この教訓というか対策は行っていないことがわかりました。

○神戸学院大学現代社会学部社会防災学科安富ゼミ3

次に、ラジオ出演と新聞に活動を取り上げていただきました。ラジオ出演は去年も行ったのですが、ラジオ関西の「時間です!林編集長」に出演させていただき、災害メモリアルアクションKOBЕの紹介や私たちのやっている活動を紹介させていただきました。また、ポートアイランド周辺で行った街頭インタビューの様子を神戸新聞と産経新聞の2社に取り上げていただきました。この新聞に取り上げていただいた結果、震災体験者の方が私たちも震災体験をお話したいと言ってくださってお話させていただきました。

お話を聞かせていただいた上野さんは阪神・淡路大震災が発生するまでは事業で成功して、お友達と前日までハワイに遊びに行くほど余裕のある順調な生活を行っています。また、娘さんも出産間近で本当に幸せの絶頂というときに震災が起こりました。この方のお話を聞いて、街頭インタビューではなかなか聞くことのできない深いお話、特に生きるとか死ぬとか震災とお金ということに関して教えていただくことができました。お話を聞いて思ったことが、日本人は余りお金の話をしないことが美德であるとされているので、公にそういった話をなさる方は少ないので、体験談はなかなか語り継がれるこ



とはありません。しかし、震災に対する知見をより深めるためには、ネガティブな体験についても私たちは知る必要があると思います。ネガティブな震災体験を聞ける機会は本当に限られているので、私たちはこの機会を有効に利用する必要があると思いました。

最終的なまとめに入ります。前年度の活動を踏襲してさらなる現状調査や教訓の収集を行うことに関しては、昨年の調査よりもさらに多くの方から震災に対してのお話を聞かせていただくことができました。また、先程の上野さんのように私たちの活動を知った方が震災体験を自発的に語っていただけたこともとてもよかったです。

次に、未災世代に防災知識を正確に効果的に伝える方法に関しては、防災キャンプの参加者という限られた範囲ではあるのですが、子供たちに定着しやすい防災教育活動は座学などのような形よりも体を動かすようなもの

が効果的であるということがわかりました。

自分たちの在籍する大学での調査ですが、大学生510名の方に協力していただけたので精度の高い調査ができたと思います。また、結果は予想していたとおりのもので予想とは違ったもの、調査したことで大学生が防災意識をどれくらい持っているのか、教訓をどのくらい引き継いでいるのかということをより深く理解することができました。

課題は、昨年の反省点を生かして実践的な活動まで進めることができなかった点です。この点を来年、災害メモリアルアクションKOBÉでの活動や、個人的な活動に生かしてしっかりと実践まで繋げていけたらいいと思います。以上で発表は終わります。

ありがとうございました。



【街頭インタビュー】



HATで「ほっと」できる場所 兵庫県立大学 ほっとKOBE



活動目標：HATに「笑顔」が広がるように

活動のきっかけ

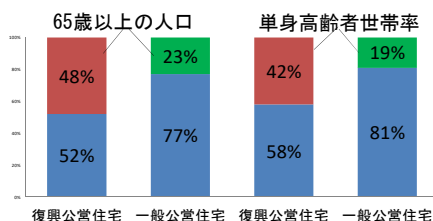


「復興」という名前の住宅なのに、震災で苦しんでる人が今でもいるなんて…ショック。何か自分にできないか…

復興公営住宅の実態

阪神・淡路大震災から20年以上経過した今でも、復興公営住宅において孤独死が相次いでいます。震災後、復興公営住宅のどこに誰が入居するかは抽選によって決められたため、被災者がもともと住んでいた地域などは考慮されることはありませんでした。よって、被災者の震災前のコミュニティは崩壊したうえ、高齢被災者がまとまって入居することになり、孤立してしまった高齢者が数多くいました。

復興公営住宅と一般公営住宅の比較



ほっとKOBEの概要

HAT神戸灘の浜の復興公営住宅の一角を住民さん達の交流スペースとして運営しています。現在復興住宅には、長年住んでいる被災高齢者、新たに入居した高齢者や若者世帯と様々な方が入居しており、コミュニティ形成が難しい状況です。そこで、地域の誰もが集える場所を学生が運営し、学生が幅広い世代間の橋渡しを担うことで、住民同士の繋がりをつくる活動をしています。

<活動目的>

- ①復興公営住宅に住む高齢者の孤独、寂しさを癒す
- ②幅広い世代の地域コミュニティ形成の支援
- ③子どもの居場所の提供

週に2回のカフェ
2か月に1回季節毎のイベントも開催しています

活動中の出来事

(学生の気持ち)

初期

「こんにちは！」 「……」

無視かぁ。
悲しいなあ。
だけど、そういう人にこそ支援の手が必要なんだ！



「あの人は市営の人。あの人は公団の人」

なんで住んでる場所で呼ぶのかな？
心の壁があるのかな。



「ここなに？宗教？
絵買われんの？？」

すごく警戒される…
なかなか信用されないなあ。

きのうここにお花を植えたのに、もう無くなってる。踏まれてる。

なぜこんなことをするのだから。



活動中の出来事

軌道後



「ここに来るとほっとするわ」
「普段は話さないから嬉しい」
「元気にやっているか？」



「うちの親、離婚するねん！
来年からどこに住むかわからなくて、〇△＊◇★…」



「すごい弾丸トーク…
普段吐き出すところが少ないのかな。」



「挨拶しても返ってこない。陰口も言われた。だから自分からは挨拶しません」
わかる。その気持ち。だけどこのままだと、どんどん1人ぼっちになっちゃうのに。



「ここは学生と話をする所や！」

「ここは皆で話す場所や！」

ケンカしてる…どうしよう。
住民さんによって考え方が違うのか。



1年半の活動で感じたこと

街には様々な問題が絡み合っていて、これがHAT神戸の問題と一言ではいえません。そのような問題は、地域に入り込み、そこで住民さんと信頼関係を築いたからこそ気付けるのだと思います。

震災から20年間ずっと複雑な悩みを抱え、打ち明けられない方がいます。最近この街に住み始めて、思うように友達ができずに悩んでいる方もいます。家の問題を子どもながらに感じ取り、ストレスを抱えている子どももいます。そのことを多くの人に知ってほしいし、感じてほしいです。数々の問題を知るたびに、私は驚き、悲しくなりました。問題を知ったのに、自分は何も解決できない無力さを、日々感じていました。だけど、ほっとKOBEで挨拶を返してくれるようになったり、高齢者の方と深い話ができた、子ども達と思いっきり遊んだり…みんな笑顔でした。私自身が、その笑顔に救われていました。始めはなかなか打ち解けられず、警戒され続けましたが、我慢強く地域に入って活動した結果、いつの間にか信頼関係ができていました。私が支援する側だと思っていたけれど、私が地域の方から見守られていました。この、住民さんとの「気にし合う」関係というのが、コミュニティなんだと思います。自分のことを覚えてくれる人がいることが喜びになるのだと、活動を通してわかりました。この活動は一筋縄ではいきません。辛いこともたくさんありました。だけど、辛いと感じるところこそ、解決すべき問題があると思い、頑張ることができました。23年前の震災がきっかけで、今もなお苦しい思いをしている人がいることを忘れてはいけません。完全な復興はとても難しいことです。何年経っても、あらゆる形で支援し続けることが重要だと思っています。

○兵庫県立大学「ほっとKOBE」 兵庫県立大学「ほっとKOBE」の報告をさせていただきます。このたび発表を務めます、兵庫県立大学経営学部4年の一ノ瀬美希です。よろしくお願いします。

まずは、この「ほっとKOBE」という活動を私が始めたきっかけについてお話しします。私が高校生のとき、テレビで阪神・淡路大震災の復興住宅というところで孤独死が相次いでいるというニュースを知りました。このころ私は高校生なので、震災から17年経っているのにこのようなニュースに私は衝撃を受けました。未だに震災で苦しんでいる人がいることと、また復興という言葉が入っている住宅の中で、こういった問題が起きていることにすごくショックを受けました。これを知って私が何かできることはないかなと考えたことが、「ほっとKOBE」に至る初めのきっかけです。

1995年に阪神・淡路大震災が発生して、その被災された方は避難所での生活、その後仮設住宅への入居が始まります。さらに復旧が進むと復興住宅が建設され、震災で家を失った方はここに入居します。当時、仮設住宅や復興住宅への入居は60歳上の高齢者世帯または障害者のいる世帯など社会的弱者を優先する方針で決められました。また、入居する世帯は抽選で決められました。そのために被災者は避難所仮設住宅、復興住宅と転居を繰り返すたびにもともとのコミュニティーが崩壊してしまい、御近所さんたちとばらばらになってしまいました。

一般の公営住宅と復興住宅を比較すると、復興住宅の65歳以上の高齢者率48%で、単身の高齢者世帯率は42%です。大変深刻な数字です。公営住宅の高齢化は全国どこでも言われていることなので、復興住宅に限ったことではないと思われる方もいるかもしれません。しかし、この割合が表すように復興住宅は一般の公営住宅と比べて65歳上の高齢者世帯も単身世帯の割合も2倍以上です。高齢者世帯が多いというだけでも深刻な問題だと思えます。

それに加えて、復興住宅にはもともとのコミュニティーというものがありません。そのような中で孤独を感じる高齢者の方が数多くいらっしゃいます。ここHAT神戸は震災後にできた、もともとコミュニティーのない新しい街です。復興住宅が数多く建ち並んでいます。現在、HAT神戸の復興住宅には震災後から長年約20年暮らしている高齢者の方、また最近入居された高齢者の方、最近入居された若者世帯と様々な方が入居されています。長年住んでいてここでしっかりとコミュニティーができていているという方ももちろんいらっしゃいますが、ずっ

と住んでいるけれども孤独から抜け出せずになかなかお友達がいないという方もいらっしゃいます。また、新たに入居した方も同様にその場に入りづらいと感じている人もいます。また、若者と高齢者がつながる機会というのがほとんどなく、住民間でコミュニケーションをとることができないのが現状です。震災から23年が経過しますが、コミュニティー形成が困難な状況となっています。

このような問題を受けて私たちは活動目標、HATに「笑顔」が広がるようにを掲げました。活動の目的は3つです。復興公営住宅に住む高齢者の孤独、寂しさを癒やす。幅広い世代の地域コミュニティー形成の支援、子供の居場所の提供です。地域の高齢者から子供たちまで誰もが集える場所を学生が運営していて、その学生が幅広い世代間の橋渡しを担い、住民同士の繋がりをつくる活動をしています。

HAT神戸灘の浜の復興公営住宅1階にあるテナントを借りて、そこのスペースを活動場所として、2015年10月にオープンし、約2年半活動しています。週に2回、この場所を開けて、来てくれるおじいさんおばあさんにお茶やお菓子を出してゆっくりお話しています。子供たちもたくさん来てくれるので一緒に遊んだり、宿題をお手伝いしたりしています。おじいさんおばあさんたちはここで学生と話したり、子供たちと一緒に遊んだりすることが本当に嬉しいようです。ここに来るとほっとするわと言ってくださることがとても嬉しくて私たちのやりがいになっています。

また、2カ月に1回イベントも開催し、地域に賑わいをもたらす、また幅広い世代の多くの住民さんたちが交流できる場をつくっています。こちらの1番目の写真がお花を植えて、この「ほっとKOBE」の周りの花壇を綺麗にしました。2枚目の写真がハロウィンイベントでみんな一緒にトリックオアトリートを開催しました。子供たちと学生と一緒に、地域のおじいさんおばあさんのお家を回ってお菓子をいただきました。幅広い世代が関わる



このできたイベントとなったと思います。今年8月に開催したプールイベントでは、「ほっとKOBE」の前にプールを設置して、暑い中でしたが子供たちと楽しく遊びました。こういったイベント時にはチラシも作成して、ポスティングを行って宣伝もします。「ほっとKOBE」を多くの方に知っていただき、そして多くの方と繋がることのできる場になれたのではないかなと思います。

また私たちは地域の様々な催し物にも参加し、お手伝いしています。8月夏休みに子供たちのお勉強を教えるサマースクールやなぎさの夏祭り、親子料理教室、餅つき大会などです。こういったイベントに学生が入る影響というのはとても大きいものだと感じています。イベントをより活性化させるに加え、またお手伝いしながら地域コミュニティ形成の支援も行いました。地道にこういった活動を行って様々な人と「ほっとKOBE」との繋がりを広げました。

「ほっとKOBE」の活動をしていて印象に残っている出来事を少し御紹介します。オープンした後の2015年10月頃、私が住民さんにこんにちはと挨拶しても返してくださる方は本当に少なかったです。顔を見ずに無視か、または怪しい人を見るような目で私は見られたりとか、そんなことばかりでした。とっても悲しい気持ちになります。でも私たちはそれでも笑顔で挨拶を続けました。そういった挨拶も難しい方にこそ支援の手は必要なのだったからです。また、おばあさんからは、何、ここ宗教なん、絵でも買わされるみたいなのすごく怖い顔で聞かれたこともあります。復興住宅にお住まいの高齢者の方はすごく警戒心が強いと感じました。これは震災後すぐ復興住宅には高齢者が多いことでひどい押し売りや、詐欺が横行した経緯があるそうです。そういったことも理解した上で私たちはしっかり誠実に住民の皆さんと向き合おうと思いました。

活動が軌道に乗ってきて住民の皆さんとたくさんお話しできるようになってきた頃に、おばあさんと話している中で気になることがありました。ある住民を指して、あの人は市営の人で、あの人は公団の人と呼び合っているのを耳にしました。それぞれ住んでいる住宅でその人を呼んでいる、どうしてなのかなと疑問に思ったのですが、HAT神戸の灘の浜団地の中には同じ復興住宅でも市営、県営、公団と様々な住宅が共存しています。外観では全く違いはわかりません。それぞれ住民がどこに住むかは、初めお話ししたとおり抽選で決まりました。勝手に決まったことなのに、住んでいる場所でその人を呼び合うなんて無意識のうちに心の壁ができてしまっているのではないかなと感じました。

また最近引っ越してきたあるおばあさんのお話の中で、御近所さんに挨拶しても返ってこない、あと陰口も言われてる、だから自分からは挨拶しませんとおっしゃっていました。私はとても悲しいことだなと思いました。もともとこの地域に住んでいる方で孤独を感じている人もいて、最近引っ越してきた方もこの街は冷たいなと感じている方がいます。私はこのままではいけないなと思いました。

先日、「ほっとKOBE」でアンケート調査を行い、HAT神戸内で御近所つき合いはありますかという質問をしました。HAT神戸の中にある民間の分譲住宅にお住まいの方は、「よくお話をする人がいる」と「挨拶はする」という方がそれぞれ50%、50%でした。それに比べて復興住宅にお住まいの方は「挨拶もほとんどしません」という方が24%もいらっしゃいました。また、地域のイベント、地域活動に積極的に参加していきたいですかという質問には、これも違いがあらわれました。分譲住宅では「とてもそう思う」、「そう思う」と答えた方で88%も占めていますが、「全くそう思わない」という方は0%でした。しかし、復興住宅では「どちらとも言えない」、「そう思わない」、「全くそう思わない」と答えた方は合計で55%で半分以上です。地域との関わりを積極的に持とうと考える方がすごく少ないことが見てとれます。

私は2年半のこの活動を通じて感じたのですが、今ではほとんどの住民の皆さんが挨拶したら笑顔で私に返してくれるようになり、おじいさんおばあさん、また子供たちの日頃の悩みを打ち明けてくれるような関係になりました。とても嬉しいです。

震災がきっかけでこのHAT神戸という街ができたのですが、そこで様々な問題が絡み合っていて、これがHAT神戸の問題だと一言では言いあらわせないと思います。でも地域に入り込んで、その地域の住民の皆さんと信頼関係を築いたからこそ問題に気付けるのだと思います。震災から20年間ずっと複雑な悩みを抱えて打ちあけられない方がいらっしゃいます。最近、この街に住み始めたけれど友達ができずに悩んでいる方もいらっしゃいます。また、家の問題を子供ながらに感じ取ってストレスを抱えている子供もいます。そのことを多くの人に知ってほしいし、感じてほしいと私は思います。

様々な問題を知る度にすごく悲しい気持ちになりました。でも問題を知ったけれども、自分には何もできない、解決できないなという無力さを日々感じていました。だけど、「ほっとKOBE」に来てくださる方は皆さんすごく笑顔で、その笑顔にすごく救われている自分もいます。初めは警戒されたけど、我慢強く地道に活動した結

果、いつの間にか信頼関係はできていました。おじいさんたちから最近でも元気かと声をかけてくださったり、すごく御近所さんという感じで、私が支援する側か思っていたのですが、そうではなくて住民の皆さんが学生の活動をすごく見守ってくださっていることがとても嬉しいです。住民の皆さんと気にし合う関係がコミュニティなのだと思います。こういった地域に入り込んでコミュニティ形成をする活動は一筋縄ではいかず、つらいこともたくさんありました。でもつらいとか難しいと感じるところにこそ解決すべき問題があるのだと思います。

私が生まれる前の震災がきっかけでまだこういった問題があるということ、今なお苦しんでいる人がいるということを忘れてはいけないなとすごく思いました。私はこの3月で卒業なので、この「ほっとKOBE」という場所はコミュニティの場としてHAT神戸の住民さんが引き継いでくださいます。この場所が目標である『HATに「笑顔」が広がるように』をもっともっと実現できると思っています。以上で発表は終わります。

御清聴ありがとうございました。



関西大学 社会安全学部 近藤研究室チームCREDO



Graduate School and Faculty of Safety Science

FSS

災害情報研究室(近藤ゼミ)
kondo.s@kansai-u.ac.jp

ぼうさいマイCREDO

関西大学社会安全学部
近藤誠司研究室

ぼうさいマイCREDOとは

ぼうさいマイCREDO

CREDO(クレド)は、ラテン語で「約束・信条」という意味。「ぼうさいマイCREDO」は、防災に関して、「自分は～します」という宣言文のかたちで、前向きな思いを表明するもの。

反転

ネガティブ・スパイラル
「震前通談」(高知県黒潮町)
「諦めのムード」(高知県四万十町)
「避難放棄者」(兵庫県尼崎市)
神戸でも「後ろ向き」なことばのオンパレード⇒閉塞を打開したい

挑戦

ことばのチカラを
テコにして
みんなでポジティブに
防災に挑もう!

広がる
CREDO
の輪



3rd STAGE
もっと
外へ

おもなプロジェクトの紹介

神戸長田真陽 CREDOカレンダー作戦

300名近い住民のみなさまの協力を得て、月めくりのCREDOカレンダーを制作。地区限定で、500部を制作・配布しました! 多くの人から「いいね!」の声。その効果とは?



震災の経験を伝える機会になったと、個人(左)から右へ、地区(右)が笑顔です(下:真陽君)



京丹波町 CREDO放送プロジェクト

京都府京丹波町ケーブルテレビと協働して、防災意識向上を企図したCMづくりと、防災に対して前向きな思いを醸成する特集番組づくりをおこなっています。



撮影・編集を学生が担当しています。しっかり技術を習得するため、まちの情報センターに、インターシップの受け入れを始めていただきました。



住民アンケートを実施したところ、大学生が制作した防災特集や防災CMを多く見た人ほど、「益になっている」というポジティブな結果が得られました。次年度は、さらに進化します!

草津山田学区 地区防災計画策定プロジェクト



本邦初の試み、町内会全員のCREDOを掲載した地区防災計画が間もなく完成します! PDCAサイクルの中で、「&S」=「プラス・SHARE」を明確に位置づけたアクションとなりました。山田学区方式は草津市全域(14の小学校区)で展開していきたいと思えます。



メッセージ



信じてます
ことばの力



近藤ゼミ

○関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO

皆さん、こんにちは。関西大学社会安全学部3回生の吉田周平です。「ぼうさいマイCREDO」小さな約束プロジェクト3年目の成果を報告したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

最初に、「ぼうさいマイCREDO」とは何なのか、改めて御説明します。CREDO (クレド) とはラテン語で約束・信条という意味です。「ぼうさいマイCREDO」は防災に関して、「自分は～します」という宣言文の形で前向きな思いを言葉にして約束します。阪神・淡路大震災を経験した神戸においてさえも、防災に対して後ろ向きな言葉が溢れていることからこの取り組みを始めました。

こちらが「ぼうさいマイCREDO」の一例です。神戸市長田区の丸五市場では、鶏肉屋の御主人や中華料理店のおかみさんが、津波が来たら率先して避難することを明るく前向きに宣言してくださいました。

災害メモリアルアクションKOBЕの初年度には、神戸市長田区真陽地区でおよそ200人から「ぼうさいマイCREDO」を集めて、月めくりのカレンダーにまとめてみました。そして500部印刷、製本して地区の皆様へ配付しました。半年後、CREDOカレンダーに参加した皆様へヒアリング調査したところ、CREDOで宣言した言葉のとおり約束を果たさなければならぬと感じているとか、子供たちの手本になるようにCREDOの言葉のとおり頑張りたいなど責任感や使命感を感じている人が大勢いることがわかりました。神戸の前向きな言葉をテコにした取り組みは、防災の取り組みに対してポジティブな効果を及ぼすポテンシャルがあると確信しました。

そこで3年目、本年度はもっと外へ、つまり神戸の外で「ぼうさいマイCREDO」を試してみることにしました。主に福井、滋賀、京都、大阪、兵庫、和歌山、徳島の各府県でそれぞれ手法を変えて取り組みを進めています。

例えば、京都府京丹波町では「ぼうさいマイCREDO」の手法を生かして、防火キャンペーンCMを制作しています。僕たち学生とケーブルテレビがコラボして、毎日6回、火の用心のCREDO・CMを放送しています。既におよそ600人の町民さんが出演しています。京丹波町ではCREDO・CMを知らない人がほとんどいないくらい浸透してきています。最近では、火の用心CMに出演したいので撮影に来てほしいと連絡して来られる方もいます。昨年度住民調査した結果、CMをたくさん見た人ほど防火意識を高め、防火行動をとる比率が高くなることわかりました。

ただ単にCREDOを宣言するだけでは知識が身につかないという課題がありましたので、今年度からは新た

に広域消防組合と連携して普及啓発番組「安心ほっとライフ」の制作をしています。さらに京丹波町内の質美地区では各家庭に引き込んである告知放送端末を活用して、2週連続で4回、大学生が「防災ひとくちメモ」を放送することにしました。せっかくですので、一つお聞きください。

(音声始まり)

「質美地域の皆さん、関西大学社会安全学部の小溝恵里佳です。毎週月曜日は「防災ひとくちメモ」をお伝えします。第2回目は、大雨や土砂災害の恐れがあるときの重要な情報についてです。危険が高まると行政から「避難準備・高齢者等避難開始」という情報が届きます。御高齢の方、障害のある方、乳幼児がいる家庭など、移動するのに時間がかかる人はこの段階で速やかに避難を始めてください。「避難準備・高齢者等避難開始」という情報を聞いたら落ちついて早目の避難を。「防災ひとくちメモ」でした。」

(音声終わり)

今後はこのシステムを活用して、住民の皆さんのCREDOを放送する取り組みを展開してみたいと考えています。

次に滋賀県草津市では、地区防災計画策定事業に合わせて住民の皆さんのCREDOを採取して防災意識を高めることを考えています。既に昨年度は山田小学校区で地域防災計画をつくり、その冊子の中に全ての町内会長さんのCREDOを掲載しました。さらに、町内会長さんたちのCREDOを音声収録して、コミュニティーFMのえふえむ草津で放送したりもしました。この取り組みは高い評価を受け、展開に広がりを見せることになりました。本年度の6月からは毎月2回、定時で放送する



ことになったのです。僕たち近藤ゼミの学生が企画、制作、出演を担当しています。番組のタイトルは「Happy BOUSAI」、地元のフリーペーパーとコラボしたり、草津市の広報紙でPRしていただいたり、活動の場も広がりつつあります。

「ぼうさいマイCREDO」は、僕たち近藤ゼミのほうから働きかけを行って活動を広げているところが多いのですが、3年目になると自然に広がりを見せ始めています。大阪府吹田市では、まちづくりセンターが中心となってCREDOカレンダーづくりを進めています。また大阪府高槻市の日吉台地区では、防災訓練の際に住民同士でCREDOを見せ合う取り組みを11月に行いました。

嬉しいコラボも増えています。この秋、尼崎市の難病患者さんの団体と防災シンポジウムを行いました。その場で知的障害者家庭の皆様と素敵なCREDOを共有しました。「つらい時にも笑顔で頑張ろう」、「家族で防災を共有する」と約束してくださいました。次年度はこの繋がりを生かしていきたいと考えています。夏には和歌山県広川町で地元の小学生が防災のガイド（こども梧陵ガイド）をするプロジェクトをサポートしました。その際にも素敵なCREDOを共有しました。一つだけ紹介しますと、6年生の中には「津波の避難三原則を守ります」という力強いCREDOを掲げてくれた女子児童がいました。地域の偉人、濱口梧陵を見習って町の防災力に力を

尽くしていきますと約束してくれました。

さて、最後に僕自身の取り組みを紹介します。僕は徳島県徳島市の津田地区で生まれ育ちました。津田のために何かできないかと考え、CREDOの写真を集めてふるさとのCREDO写真集を制作しようと今作業を進めています。これまでのCREDOの取り組みと一番大きく異なるのは風景写真をたくさん撮影していることです。津波の被害を受ける前に、美しいふるさとの風景を残しておきたいと考えたからです。そして、その風景に防災に対する思いを重ねてみんなで共有していけるように写真のレイアウトを考えていくつもりです。今年一年かけて約100人の方の写真を撮影しました。

僕がこの活動を通して感じたのは、一軒、一軒、戸別訪問して顔を合わせて地元の人間である自分が時間をかけて教えてもらったCREDOは、単なる言葉なんかではなくて、それ以上のもの、思いを伝える言葉なんだということを認識しました。本気の防災を広げるためには、本気が必要なんだと改めて実感しています。言葉は共有したときに初めて大きな力を持ちます。僕たち近藤ゼミのメンバーは言葉の力を通じて、これからもずっと取り組みの輪を広げていきたいと考えています。

御清聴ありがとうございました。





Graduate School and Faculty of Safety Science

FSS

災害情報研究室(近藤ゼミ)
kondo.s@kansai-u.ac.jp

SKH校内防災放送

関西大学社会安全学部
近藤誠司研究室

校内防災放送 取り組みの背景

- 校内防災放送のねらい**
- 1 持続的な防災学習手法の開発 → 継続
 - 2 教育現場の負担増にならない手法 → 教育者
 - 3 防災教育と安全管理のリンケージ → 両立
 - 4 地域防災と学校防災のリンケージ → 伝承
 - 5 小学生と大学生のまなびあい → 両立
 - 6 ネガティブをポジティブに → 両立

阪神・淡路大震災20年を目前にして、挑戦がはじまりました。



防災啓発

両立

震災伝承

真陽こども放送局(SKH)



安全管理の方針と直結

右側は、実際の放送会場の様子です。高倉が存在しない真陽小学校の特性に合わせて、放送には広域避難場所をしっかりと扱います。クラス単位で編み込んだ防災の知識を身に付け、さらに自己効力感が高まるようになります。

やればできる！

協働

地域⇔学校



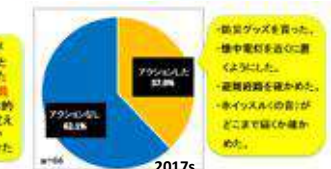
人気のコンテンツは、これだ！



毎週、放送室に児童で早押しアンケートを実施。「おもしろい?」「面白かった?」に回答してもらいます。児童がユニークに扮して、防災グッズを紹介する演出は真陽小学校で大人気！定番シリーズ化しています。ラジオドラマの制作は、これまでではなかった。防災ラジオドラマコンテストで最優秀賞・グランプリに選ばれた実績もあります。



児童の成長、長期的な教育効果



メッセージ

通算100回記念！



信じてます
ことばの力



○**関西大学社会安全学部近藤研究室チームSKH** 社会安全学部近藤ゼミ3回生の志水麻佑子です。「子供達のことばのチカラ、校内防災放送プロジェクト」と題して、本年度の活動について発表します。どうぞよろしくお願ひします。

私たちがフィールドワークを行っているのは、阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市長田区です。神戸では今、皆様が御存じのとおり、人口の約4割が震災を直接は知らない状況にあり、いかにして震災の記憶を次の世代に伝えるかが大きな課題となっています。そして私も神戸出身ですが、自分の言葉で阪神・淡路大震災のことを、実感を込めて説明することは正直いって難しいと思っています。

神戸市長田区は、国の想定によれば、南海トラフ巨大地震で最悪の場合、津波で大きな被害が出ると予想されています。私たちが年間20回以上も足を運んでいる真陽小学校は、浸水エリアの中にあります。真陽地区は過去の震災の経験を伝えていくこと、及び将来の災害に備えることという二つの課題を抱えています。防災教育の充実化を求めている小学校から何か手はないかと相談を持ちかけられたことがきっかけとなり、2014年度からゼミで支援活動を始めることにしました。

ところで先行研究によれば、防災教育のおよそ7割が単発の授業や訓練などで終わっており、持続的な取り組みにはなっていないとのこと。ただでさえ多忙な学校においては、負担が増えない方法を編み出さなければ、せっかくの取り組みがかえって迷惑になる危険すらあります。

そこで私たちが着目したのは校内放送です。真陽小学校では、音声システムを利用した放送がお昼休みに10分程度行われています。ここで毎週月曜日に防災のコンテンツを入れ込むことにしました。委員会活動として一年を通して実施されていますので、学校にとって新たな負担にはならないと考えました。放送委員の児童は5年生と6年生の10名です。大学生と放送委員の児童が一緒になって防災に関するテーマを考えています。放送は全て生放送で行われており、児童がアナウンサーとなって原稿を読むことにしています。子供たちの言葉の力に期待を寄せてみることにしたのです。では、ここで実際の放送を一部お聞きください。

(音声始まり)

「では、第1問。学校にいるときに津波の危険を知らせる「警報」が発表されたら、次のうちどのような行動をとるとよいでしょうか。1：急いで海の様子を見に行く、2：家族に知らせるため家に帰る、3：先生の指示に従って

北のほうに逃げる。正解は3の先生の指示に従って北のほうに逃げるです。防災訓練で行っているとおり、慌てずに先生の指示に従って避難しましょう。」

(音声終わり)

児童たちに、例えば「高台避難が必要です。」といった一般的な知識を伝えるのではなく、実際には高台がない真陽地区の実情に合ったローカルな情報を伝えるようにしています。お友達が話す、少し緊張した言葉を教室にいる児童たちは真剣に聞いてくれています。

2014年度に防災教育の効果を質問紙調査で確認したところ、もともと防災に関心が低かった児童のほうが校内放送を通じて関心を高めた比率が高く、意識の底上げを図るポテンシャルがあることがわかりました。しかし、それでも防災に関心を持っていない児童もまだまだいます。もっと大勢の児童に関心を持ってもらう手ではないのだろうか、児童と一緒に解決策を考えた結果、ラジオドラマを制作して放送してみることにしました。早速5年生のともみちゃんが原案を書いてくれました。あくまで防災教育の取り組みですので、楽しむばかりではいけません。そこでシナリオの中に津波避難の合い言葉、押さない、走らない、しゃべらない、戻らない、低学年を優先に、その頭文字をとった「お・は・し・も・て」などの言葉を入れてみました。すると結果は大成功しました。大半の児童が面白かったという反応で、しかも知識の定着率もとてもよいことがわかりました。「お・は・し・も・て」の「て」以外は3カ月後の正答率がどれも90%を超えていました。

さて本年度、新たな試みとして、小学生の間で大人気のユーチューバーに放送委員の児童が扮して、防災豆知識を伝えるという演出を行っています。普段は音声のみの校内放送ですが、各教室にあるモニターにパソコンでつくった静止画をスライドショーで写し出しながら放送することで、この演出が可能となりました。ユーチューバーに扮した5年生の児童、りゅうき君が百円ショップで買い揃えることができる防災グッズを紹介しました。私たちは毎回放送するたびに教室で面白かったかどうか挙手アンケートを行っています。この折れ線グラフの縦軸は児童たちの評価点の平均を表しています。その結果を見てみると、ラジオドラマに匹敵するほど児童たちから高い評価を受けていることがわかりました。

教育効果をしっかりと検討するために、毎年度、春と秋に高学年の児童を対象として質問紙調査を実施しています。その中で知識が増えたか確認したところ、知識が増えたと実感している児童は45.5%もいました。自由記述で

何を一番覚えているか具体的に書き出してもらったところ、よく書かれていたのが、そうです！ユーチューバーに扮した児童が紹介していた内容でした。例えばこの救命用のホイッスルでした。5年生のクラスでは今、りゅうき君が扮するユーチューバーは大人気のキャラクターとなっていて、この演出は校内防災放送でシリーズ化しています。

本年度の調査では、4年度分の校内防災放送の取り組みを踏まえて、実際に児童が何らかの防災行動を行ったのかも尋ねています。その結果、全体の37.9%が具体的なアクションをしていました。ユーチューバーに扮したりゅうき君が紹介していた「防災グッズを実際に買った」という児童もいましたし、中には百均のホイッスルの音がどこまで届くか実際に確かめたといった回答までありました。

防災意識が向上し、知識も身につく、行動も起こしてくれている。さらには、校内防災放送をしたくて放送委員に立候補してくれる児童さんも年々増えています。「子供たちの言葉の力」をテコにしたこの取り組みは手応えが十分なような気がしました。しかし、よく調べてみると大きな課題があることもわかってきました。それは児童たちが「防災の話題を家庭ではしていない」ということです。私たちの調査によれば6割以上の児童が防災の話ほとんどしていません。校内防災放送の取り組みをした2年度目も、3年度目もこの傾向は変わることはありませんでした。この課題を何とか軽減することができないか。そこでスタートさせた取り組みがこちらです。

放送の力だけに頼っていてもなかなか突破口が見出せないで、本年度からこのような手づくり新聞、「ぼうさいタイムズ」を大学生が作成して全校児童の保護者に配ることにしました。毎月1回発行して、現在第12号までつくりました。小学生の言葉の力に大学生の言葉の力を

加えたこの取り組みの効果を今、アンケートを実施して分析しているところです。

さらに、家庭だけでなく地域も繋ぐために、校内防災放送には地域で防災活動に取り組んでいる人たちをゲストに招いて生出演していただくことにも力を入れています。2014年度には20回、2015年度には32回、2016年度に28回を放送し、本年度12月11日、おかげさまで通算第100回目を迎えることができました。

第100回目の放送は、記念とするために放送委員の児童全員で力を合わせて、渾身の作品をつくりました。6年間も保存がきくナポリタンスパゲッティや缶詰に入ったチーズケーキなど最新の非常食を試食して、その結果をクイズにして紹介しました。

今月14日には真陽小学校で「真陽防災の集い」が行われます。そこでは全校児童、保護者、地域の皆さんの前で校内防災放送のこれまでの取り組みの成果を披露します。児童や大学生の言葉を、真陽地区みんなの言葉にしていこうと思っています。もちろん、言葉だけにこだわっているのではなく、言葉を通して阪神・淡路大震災の経験を掘り起こしたり、防災力を向上させたりできればと考えています。

児童の防災学習を支援するために始めたささやかな取り組みですが、学んでいるのは決して児童だけではなく、私たち大学生も同じだと考えています。児童に伝えるためにもしっかり勉強しなければなりませんし、児童から教えてもらうことさえあります。このプロジェクトでは、言葉を通して「学び合う」こと、そのためにたくさん「語り合う」ことをこれからも大事にしていきたいと思っています。

御清聴ありがとうございました。



公開サロン 「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」



○**司会** 私たち学生は自分たちの活動を身近に感じてもらいたいと、日々その「伝え方」に試行錯誤を繰り返しています。一方で私たちは被災体験を豊かに語る人、ふとしたときにつぶやく人、直接は語らない人など、さまざまな人と言葉に出会い、その「受け取り方」も考え続けてきました。

今回の公開サロンでは、自分たちの活動についていかなる方法であれば伝えたいことが伝わるのか、語りや体験学習など具体的な方法も踏まえながら考えます。それとともに「伝わった」と手応えが感じられるときはどんなときなのかを共有し、受け手との関係についても考えます。

○**司会** 出演者を御紹介いたします。

ファシリテーターを担当していただきます、ひょうご震災記念21世紀研究機構、研究戦略センター主任研究員の高森順子さんです。

続きまして、グラフィックファシリテーターを担当していただきますTAGAYASUの鈴木さよさんです。

サロン参加者につきましては、本日御参加いただいている学生さんや関係者の皆様になります。意見交換にぜひ御参加ください。

ここからの進行は高森主任研究員にお願いしております。それではよろしく申し上げます。

○**高森主任研究員** 災害メモリアルアクションKOBENになってから3回目になりました。その中で昨年度、少し参加していただいた方も、大学生高校生の方も、運営に関わった委員の先生方が後ろ側に多くいらっしゃる状況の中で、公開サロンを実践するのは1年ぶりとなります。この中で、今回「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」というテーマが決まったわけです。このテーマは我々や委員のメンバーが決めたのではなく、参加している学生さんの中で、様々な案が出た中でこのテーマで話し合いましょうということで決まったものになります。

少しその前に説明したいこと、それは公開サロンという言葉の意味合いです。公開サロンを想像していただき、サロンというと何かヨーロッパのちょっとしたお茶会のようなものを想像されるかと思います。公開サロンは、ある一つの正解とか唯一の答えを求めるものではありません。そうではなく、前半の団体ごとの大学生、高校生たちの報告を聞いていただいた方は段々わかってこられたと思うのですが、この災害メモリアルアクションKOBENは、それそのものが活動ではないのです。様々な活動をしている団体が寄り集り、集まった中で報告し合うことも意味はあるのですが、その背後にどんな思いがあるのかをもう一度考える場が必要じゃないかということから、公開サロンの形をとって、昨年度から始まった実験的な試みの一つになっています。

今回の7組の発表を聞いていただいた後なので、状況はわかっていただけかと思えます。各団体でしかもその団体の中の人たちも先輩も、後輩もいることで、長期にわたって防災・減災のこと、あとは神戸の災害に遭われた方と親密な関係をずっとつづられてきた方、この一年の中で防災という問題に関心を持って参加してみようと挑戦する人たちもいるわけです。かつ、防災に関しては、熟練した活動、要は活動でも長期にわたってずっと活動を継続されていて代わりを繰り返しているものもあります。その一方で、このイベントを今日は成功させようと活動を続けてきた、団体もあるわけです。

そう考えると、今回、我々は若者たちにとって防災・減災を考える場をつくらうと最初は始まったけれど、若者というくり方の大雑把さを感じざるを得ないと思います。だからこそ、今回はこの若者にくられるあなたたちの個々の話を聞いていきたいなというのが思いとしてあるわけです。

今回は、このサロンで若者たちのそれぞれの思いに何とか接近することを試みて、達成したいポイントとして



は“あ”こういう考え方があるのかとか、この考え方でやっぱりいいんだと納得できたというように、今後の活動や、団体の展望などを下支えするような、一歩抽象化したテーマを考えることを通じて、この活動をどうアップデートしていくべきなのか、いや、アップデートではなく、継続が大事だという結論になっていくのかというのは来年度に持ち越されるとして、そのための材料を提供できるような場になればと思っています。

この公開サロンは、今日集まって、さあ始めましょうで始まったものではないのです。今回に関しては、3つのプログラムが今年行われていたわけなのです。まず、8月17日にキックオフミーティングが行われました。これは昨年と同様の形になっていまして、でも少し違うポイントはこれまでは各団体、高校生、大学生の活動の発表を聞くことが中心だったのです。その団体から1回離れて個人個人で、要は団体をシャッフルするような形です。あなたはどうしてここに来たの、何で防災に興味があるの、防災じゃないことも含めて1回、一個人同士として知り合う場ができたらいいなという思いで8月17日にキックオフミーティングを行いました。

その上で少しどうしても時間があいてしまうので、11月3日にプレサロンを行いました。少し専門的な話になりますが、対話をする、要はディスカッションをするのではなくて対話をする。相手の話を最後まで聞き、そこからどう考えるかを熟考した上で言葉を出すという、そういったものに関してすごく時間もかかり、来られている方々の信頼関係もすごく大事になってきます。時間は変えられないので、その前に、その準備体操の形でプレサロンをやることにいたしました。

その後、今日の本番1月6日に最終発表と公開サロンをやっていくわけです。今日これからお話ししたいのは、この前の11月3日に行われたこの準備段階のサロンにおいてどんな話がされたか、参加してくれた大学生さんは3分の2くらいで本当にたくさんの方が来ていただいたのですけれども、でも各団体の中でも多く参加された方もいれば、全くそういった情報が入っていない人たちもいると思うので、“あ”こんなことやっていたんだとちょっと共有していただきたいと思います。後ろ側に座っていらっしゃる大人な方々には、今回「もやもや」というのがキーワードになるのですけれども、「もやもや」をとにかく出し切ってもらいたいことをやりましたので、どんなもやもやが出たのかを整理してお伝えしたいと思います。少し時間をいただいてこの準備の段階でどんな話し合いがされたのか、どんな言葉が出てきたのかというお話をさせていただきたいと思います。

では11月3日に、どんなことをやったのかを簡単に説明したいと思います。まず、人と防災未来センターの東館に集まって、集まった中で最初にやったことは、各机ごとに団体をシャッフルした形で6人か7人ぐらいのグループをつくっていただきました。そこで最初にやることは、一斉に話してくださいというのではなく、まずは付箋紙を大量に置いた状態で活動している中でもややもやしていること、腑に落ちないこと、気になってること、活動のメンバーには言えないけれど何かこれで本当にいいんだろうかと思っていることを書いてください。それはキーワードでも構いませんし、短い短文でも構いませんということで、徹底的に10分間位で書き出してもらいました。ただ書いてあるものはキーワードないしは短文ではないので、これが一体どういうことを意味するのかというのは説明がないとわかりません。そこで各グループの中だけで、この付箋はどういう意味なのかをみんなで共有してもらいました。その共有してもらった後に同じような意味だったり、経験だったり、あとは同じ言葉を使っているとか、そういったものをまとまりにして、そのまとまりにも意味をつけることでタイトルというか言葉というものを付けてもらうという作業をしたわけです。その作業をした上でグループごとに発表して、最終的に今日のテーマで話し合うことも含めて5つの問いが生まれ、その結果として「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」というテーマが決まったわけです。

このテーマが決定したのはもう2カ月前のことです。もう一度整理して、どういったもやもやからこのテーマが生まれたのかを一度共有した上で、話を進めていきたいと思います。くくられているものを整理した上で、その一部は私自身もまとまりのタイトルつける形で出てきたものが、全部で代表的なもので9つあります。プレサロンで出た活動の「もやもや」をまとめた資料があります。これを少し見ていただきながら、“あ”こういうものが出たんだと感じてお話を聞いていただければと思います。

この9つのテーマで話し合われる中で「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」、いつも日々会話をしている中でなかなか出てこないワードではありますが、言葉そのものがいろんなもやもやだったり、問いだ当たりの複合物なのです。わかりやすくするために、3つに分割して考えてみたいと思います。「伝えたいこと」「伝わる」「伝え方」この3つの重なった形として、問いが生まれているということです。それを今回どのようにほぐしていくことができるかと思い、もう一度この3つの言葉にこれまでのもやもや付箋を再接続してみることを通じて、どんな言葉が生まれたのかを通じて活動の臨場感とか、葛藤

とかいうものも含めて共有したいと思います。

では、伝えたいに関する事です。それに関わる者として、被災者の考えという身近という言葉が大きなくりのテーマになります。この中で、被災者の考えは、同じ災害に遭われた方でも災害に対する考え方が異なっています。これはインタビューをされたり、体験されている大学生、高校生の方もいらっしゃると思いますが、その中で被災者はこういう人なんだと一元化できない。今日、最初の話と一緒に。若者だからこうではなくて、いろんな若者がいることに対し、自分自身は被災者とくくって対応していることに対するもやもやを示してくれました。もう一つは、かなり言葉が強烈ではあるが、今さら感というのがあります。しかし、これは「自分たちが」ではないそうです。そうではなく、実際に震災に遭われた方にお話を聞いたときに、いやでも今さらこの話を聞かれてもというような言葉が返ってくるそうです。その中で、ここに関わることを言っていた高校生、大学生の方が言っていたのは、自分たちのほうが防災とか減災とか一生懸命に頑張ろうという気持ちを持っていて、体験した人にお話を聞きたいと思っているけれど、体験をした人がもういいじゃないかと諦めの言葉をかけてこられるとおっしゃっていました。これも大きな問題だと思えます。それと関連するようにして、後継者問題というものもあるのではないのでしょうか。

次は、身近という言葉です。この言葉はまとめた資料を見ていただくとわかるのですが、すごくたくさん言葉が出ていました。身近という言葉は、伝えたいという言葉に言い換えられるか考えてほしいのですが、何々を身近に感じてもらいたいというのが伝えたいという言葉と同義語になるかどうかです。まず身近とは一体何なんだという定義がわからないことを感じている人たちもいます。次に、ほかの人から聞いた話が身近に感じられない。自分に置きかえられない。これは災害体験のみならずかもしれない。そういった感覚を覚えていることがある。災害は身近に感じられない。これは災害そのものが非日常ですから、感じられないのは当たり前かもしれないけれども、もしかしたら災害を身近に感じてもらいたいとよく言います。その言葉そのものがすごく難しい問いなんじゃないか考えていることで葛藤があるようです。

では次に、伝わるに関する事は3つ関わりがあることが見えてきました。まず、伝わるでは受信者、要は情報なのかもしれないですが、情報の受け手と、発信する側との関係に関わることをピックアップしてみました。そのまとまりの中で危機感というのが一つあります。危機感に関して、これから起こるとされている災害への危機感

のなさ、防災を学んでも時間が経てば忘れていくことがあげられます。災害への危機感のなさは、まとめた資料の4つ目のところに、「防災に興味がある人が少な過ぎる!」と書いてありますね。多分、これを書いた彼、彼女はすごく意識が高いんだと思います。でも、一方で防災を学んでも結局忘れてしまうというような感覚も持っている人もいます。もしかしたら、それは彼はそうだけれど、この彼はそうじゃないではなく、同じ人でも同じ問題が起きているかもしれないです。

次に、聞き手とのズレに関する言葉も多かったです。これは被災者が伝えなかったことは伝わっていないという問題と、共通する部分があるので、具体的な例という感じがしますが、語り部さんの話を聞いても余り頭に残らないで、苦労話で終わるイメージがある。これを考えると、もしかしたら語り部さんはどういふことを伝えなかったのかというのを最後聞いてみないとわかりませんよね。でも確かにこの聞き手であった彼、彼女は、決して語り部さんは苦労話を話したかったのではないんじゃないかということまでは気づいているのです。でも、そこで終わってしまっているんじゃないか、本当はもっと話したいことがあるんじゃないかというような思いもあるのかもしれない。本当にあくまでこれは一短文でしかないの、推測の部分もありますが、本当にいろいろな背景、問題が感じられる言葉だと思います。

そして、他人事という問題です。それは言葉だけで行動に移せていない。これは本当に子供も大人もみんなあります。あとは他人ごとと感じている人がいるということです。要は、自分とは関係ないと思ってしまうのが防災・減災においてずっとテーマになっており、未だにその問題は大きな壁になり、そして聞き手と話し手の間のズレ、ギャップを生み出していることがわかるのではないのでしょうか。

そして最後に伝え方の部分です。これに関しては4つ



あり、一番この部分が多かったという印象です。まず、伝え方として我々は活動を紹介してもらいますと言っていますので、活動が伝え方と短絡的に言うことができるかもしれません。そのときに共通点が多いなと思ったのは、「地域で活動→感謝される→やってよかった?!」と書いているけれど、「やってよかった」に「?」と「!」マークがついているんです。だから、「やってよかった」に対し、「嬉しい」はあるけれど、本当にそれでいいのか、この活動、感謝される、やってよかったのルーティングをすることが最善なのかを悩んでいるということでした。あと共通しているインプットとアウトプットも活動だから報告もしなければいけない、何らかの成果を実感してほしいと考えるけれど、そればかりこだわってしまっているところがある。そして高校生からの言葉が多かった、自分たちにできる活動の幅が制限されているように感じるという言葉もありました。要は、伝え方という中での活動というあり方に関して、本当にこの運動図でいいのだろうかに対して、もやもやを感じていることがわかりました。

次が、教訓です。今日の神戸学院大学さんの中では最初の問いは「教訓って伝わっているのか?」から始まったと思います。この教訓に関してもいろんなもやもやが出てきていましたがこれは“身近って何”と同じ問題です。教訓って何ということがいまいよくわからないと言っている子もいれば、教訓はわかってるという上で次の災害でこの教訓をほんまに生かせるのかということと言っている学生の皆さんもいます。そのほかに教訓って何?と言っている人とはちょっと別だと思いますが、教訓とし

て出てくることは同じようなことしかないと言っています。この問題を考える上で、教訓って一体どういうものなのを共有していると思っている人と、わからないと言っている人たちがいるわけです。だから、言葉が同じ言葉を使っていても会話が成り立たない状態が出てきているのが教訓に関する課題として出てきました。

次、伝え方とは、伝える場所、相手に関する言葉もありました。その中で、災害ボランティアの形だと思のですが、被災地から帰ってきて経験を話す場が少ない。これに関して、自分たちが経験したことが興味を持ってもらえないんじゃないかと思わざるを得ない習慣にもなると思います。今後、どうして話せる場所が少ないのかを考えることが必要で、今日のように実際に行ったことをそのまま語っていく場は少なくなっています。

もう一つは、経験していない人に伝えたいのか、準備していない人に伝えたいのかわからない。これはすごく大きな問題で、我々の昨年度の公開サロンテーマ「未災者が伝えられること」を覚えています。そのときに我々が無意識に前提としていたのは、経験した人たちから言葉を受け取り、それを翻訳して自分たちなりに解釈を加えて新たな世代に受け継ぐことを考えていたのかもしれない。でもこの言葉からわかることは、発表の中でもありましたが、災害に遭われていた方でも家具の固定をもうしていない人たちがいる。でも今、防災・減災で一生涯懸命活動をやっている災害に遭ったことのない若者のほうがそれに対する意識も持っていて、かつ危機感を何とか共有しようと思っている状況もあるんですね。そう思う



と上から下へトップダウンで経験が継承していくあり方だけでなく、相互に経験者と非経験者が語り合い、触発し合う、そういう関係でないといけないのではないかと、いうことを投げかけてくれている大きな問いにもなっていると思います。

次は、防災啓発活動のパターン化、この言葉はあるグループが書いてくれた言葉で、防災は毎回同じことばかりしているとか、自己満の防災教育をしているとか、チームでもっと革新的なことをしたいが案がなかなか出てこないというのがあります。これは少し考えていく必要があります、パターン化は同じことを繰り返します。でも、今日の話の中でも10年やっていくことで意味が出てくるんじゃないのかと、繰り返すことの意味が価値を見出している活動もあります。その一方で、同じことばかりしているってどうなんだろうと迷うこともあります。これは防災活動のみならず、人生においてもいろいろあると思うのです。このような9つのもやもやをとにかくいっぱい出しましょうとした上で、最終的に、今日この場で話してみよう、考えてみようというのが「伝えたいことが伝わる伝え方とは」となったわけです。

これがその前の段階での話し合いの状況となります。今回は昨年に引き続き、サロンでの話し合いをリアルタイムで絵にしてくださる方がいらっっしゃいます。どんなふうに見ているのか、対話するに当たってこんなふうにしてもらえたらありがたいなという点がありましたら、最初に話していただければと思います。

○TAGAYASU鈴木さん はい、ありがとうございます。恐らくこの中には、何でこの人は絵を描いているのだろうと思っている方もいるかもしれないので、安心して話してもらうために説明します。

なぜ、この公開サロンで絵を描いているのかというと、人の話した言葉は30秒後には、ほとんどの言葉が記憶から忘れられてしまうとされています。今日、すごく

大切な言葉、皆さんが感じてきた大切にしたい気持ちを残すことで、皆さん自身の気付き、次に活動していく方の気付きにもなったらいいなと思っています。こうして皆さんが何を感じたのか、どんなことでもやもやしたのか、何度も高森先生からもやもやという言葉が出てきたので、そういったものを残すために絵を描いていきます。二つだけ、皆さんにこれから大切にしてもらいたいことをお伝えします。

一つ目が全てを描いているわけではなく、いつも皆さんがどのように感じたか、何でそう感じたかを私はよくよく聞いて絵にしています。感じたことは目に見えず置き去りにされやすいので、その中に皆さん自身の価値観が表れてきます。嬉しいこと、楽しいことは話しやすいと思います。でも難しい、悔しい、もやもやしたんだということをここは話していい場です。そういったこともここで声にしてほしいと思っています。後もう一つが、「場の声を出す」と書いているのですが、普段から話したいことがいっぱいある方もいれば、私、別に何も考えてないしという方もいると思います。みんなでつくるこの場の中で突然何か私の中で言葉が生まれてきたというときがあります。それはあなたの言葉というよりもこの場で生ま



れた言葉なので、勇気を出して手を挙げて話してほしいと思っています。安心して話せるように私がここで絵を描いているので、今からの時間大事にしてきたいと思えます。よろしくお願ひします。

○高森主任研究員 先程、話した内容について、この配付紙を少し見つつ、話を進めていきたいと思ひます。今回テーマをつくるに当たって、伝えたいことという最初の言葉が出てきましたけれど、それが私のこれが合っているのかどうかみんな考えてほしいのです。伝えたいというのは身近に感じてもらいたいことと、近いですかね、遠いですかね。そのあたりを考えてみることから始めてみたいと思ひます。舞子高校のみんなは、「身近」をこの活動とは別に一年間考えてこられたと聞いて、それが今回のサロンの中ですごく重要な位置を示しています。身近という言葉に、これってどうなの、普通身近という言葉は広辞苑で引いたら理由は書いてあるわけです。でもそうじゃなくて、わかんないとなって、一年間考え抜こうとなったきっかけとか、エピソードをお話してもらえたら嬉しいです。

○舞子高校 舞子高校2年生の住吉です。昨年度までは、防災、災害に興味を持ってもらうきっかけをつくる活動し、今年度は「身近」に焦点を変えて活動しました。生き残るために、後悔しない選択をするために興味を持ってもらうという昨年度までの活動から、今年度は身近に思ってもらふことで、防災に興味を持ってもらえたら少しでも命だけじゃなくて心とかも救われるようなことがあればと考えました。身近という単語が出たのは本年度のアウトプット目標をどうしようと話をしたときに、意見を出してくれた子がいたんです。そこから身近って何だろうとずっと話し合いをして、ヒアリングの途中に一応の定義づけがやっとできた感じなんです。災害についてずっと考えている、常日ごろ災害について考えるのが身近という私たちが考える身近ではなく、ふとした瞬間にぱっと思

い出すとか考えるというのが私たちが思う身近なんじゃないかという定義づけをしていて。

○高森主任研究員 あれかな、大槌高校の学生さんと会う機会があったという話をされてましたよね。要は、身近というのがいつも毎日朝昼晩、防災・災害のことを考え続けることではなく、ふとした瞬間に思い出すということだけど、ふとした瞬間に思い出すというのは、どういふうにすればそういう状況はつくれるのか、そういう経験あります。ふとした瞬間に、この日のことを思い出したとか何かそういうことありますか。災害じゃなくて全然いいですよ。

○舞子高校 私の親の話にはなるのですが、雨の日にはすごいことがあったなを思い出したりとかそういう感じがあるらしくて、そういう感じの何らかの外的要因とか、本当に何もないうきにぱっと思ひ出したりとか、そういうときに思い出してもらふ感じが身近なんじゃないかなというふうに。

○高森主任研究員 なるほど。それというのは、でもすごく本人にとっては忘れかけていることでもあるけれど、とても大切な思い出だったりしますよね。ということを考えて、じゃあ、ふとした瞬間に思い出してもらふ、そういう身近な入り方としての防災のあり方ということを考えてのは、すごくテクニクでやる話ではもしかしたらないかもしれないですね。今そのあたりどう考えていますか。不意に思い出すというのは、震災を経験した人もそうじゃない人も少しおわかりになるかもしれないですけども、ひとり暮らしを始めたりして、料理していると料理を全然やってなかったのに、実家の母親からのこうするのよ、ああするのよという声が脳内でわーと響いてきて、できてしまうということがありますよね。そのふとしたときの言葉がとても大事だと思います。それを身近というものの最も近い言葉と今考えてらっしゃることですかね。



○舞子高校 チームの中で何回も話し合いを重ねて、その中で私たちが定義づけという形でそこに辿り着いた感じになります。

○高森主任研究員 なるほど。ちょっと身近というあり方でふとした瞬間にということろで、多分やっていることはすごい対照的でD-PRO135°さんたちの3年生の活動はお家に帰って感震ブレーカー取り付けをしますよね。この道具を入れることで身近に感じるというか、昨年度なかなかどうコミュニティーに入っているのかで悩みが多かったですという話が多かったと思うのですが、今日は何だかとても地域の中で自治会の人たちと共に歩いていくというような報告が多かったですけれど、この活動から離れても結構なので、身近と今思うとどういうふうに思われますかね。正解はないからね。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 決まったら…。

○高森主任研究員 そのお家に入って行くわけで、全然知らない人のところに入って行って、最初は不審がられる、大丈夫。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 知らない人の家に。

○高森主任研究員 そうそう、入るわけですよ。でもみんな全然心配そうにしているわけでもなく、どうぞどうぞという感じで迎え入れてくれたのですか。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 最初はよそよそしいというかそういう感じではありましたが。

○高森主任研究員 それがいつ頃から変わった。どんなきっかけで変わりました。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 何回も行ったりと仲よくなったりとかして。

○高森主任研究員 仲よくなるってどういうふうな。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° ずっと何回も話したりとか、時間を共有するみたいな。

○高森主任研究員 話すというお話でしたけれど、お話の内容はどんな感じ。どんなことを話す。思い出せないぐらいの感じ。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 普通のたわいもない話というか。

○高森主任研究員 学校生活どうなのとか。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° そういう感じとかもあるし、学校のこととか友達のこととか。

○高森主任研究員 報告を聞いていて少しは感じたのは、やっぱり道具としてのブレーカーがあるけれど、設置するだけであれば高校生じゃなくてもランダムに選ばれた人に、行政の人たちが一斉にやればいい話かもしれないですよ。でも多分、D-PRO135°さんがやろうとしている活動はそうではないわけですよ。そう考えると、身近に感じてもらうのは道具を紹介することで、多分引き入れてもらいやすくなっている、話をする会話は全然そういう話ではないことをお話されているというそんな感じ。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° はい。

○高森主任研究員 だから、この道具はこういうふうに使ってこんなふうにご注意くださいねという話だけをして帰るわけじゃないんですよ。結構そんなもん。結構そんなもんだけれど、仲よくしてもらってる？まだそこまで至ってない？

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° まだ、そこまでの関係は築けていない。

○高森主任研究員 それは活動としては今どんな気持ちですか。今、そこまで信頼関係がなくても、「これは大事な道具ですから、災害のときにはすぐ役立つからどうぞ設置してください。」ということで、「はい、わかりました。設置します。」でこの関係が終わるというのについてはどう思ってます。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135° それだけだと余りまだまだ関心というか防災に対して関心を持って



もらえるのかなというもあるし、それだけで終わるのではなく、もっともっと関わらなきゃいけないのかなと思います。

- 高森主任研究員 関わり方がなかなか難しい、わからないというところですかね。
- 国立明石工業高等専門学校D-PRO135° 今回つけたのは要援護者のお宅で、防災イベントをやったとしてもなかなか参加できなかつたりとかいうのもあって、だからどう関わればいいのかというのわからない。
- 高森主任研究員 それにはまだちょっと課題が残っているような状況なのですかね。まずは玄関に入ることできて、その道具を設置するまではいけたけれども、それはそれだけでも価値はあるけれども、でも身近に感じてもらえているか、要は自分自身だったりとか、防災活動だったりとかということところまでにはまだ至っていないところがこの2年目かなということですかね。
- 国立明石工業高等専門学校D-PRO135° はい。
- 高森主任研究員 大変正直な感想ありがとうございます。なかなかこれはすごく難しい問題なんですよ。伝えたいことで、身近という言葉は本当に舞子高校だけではなく、そのほかのところもたくさん言葉が出たんですよ。でも、何かやっぱりみんな伝えられていない気持ちを抱えながら、でもやっぱり目標のところには必ず掲げてしまっているの、何とか考えなければいけないと繰り返されている気がします。この中で関西大学の人たちに話を振ってもよろしいですか。関西大学の人たちは、本当にどんどん地域を拡大していきながら、特にチームCREDOの話を知りたいと思っているのですがいいですか。
- 関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO いいですよ。
- 高森主任研究員 この中で伝わるに関わることもかもしれないのですが、一番大事なポイントは言葉にするとい

うことですよ。要は、こういうふうに行動しますというふうに。これは誰に向けて書いてらっしゃると思ってますか。どんなことをおっしゃってますかね。

- 関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO 前向きな約束というのは、人に見られるように写真集、カレンダー、テレビCMだったりというのに載せて、責任感、使命感で守ると、約束してもらうという結論。
- 高森主任研究員 この人は自分自身に約束しているのですか。
- 関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO そうですね。自分自身でもあり、町民、周りの人、地域の方とかにも約束してるということですね。
- 高森主任研究員 そこが多分ちょっと新しい形の身近という言葉の実践例かなと思ったのです。最初この活動を聞いていると、自分たちが宣言して日記に書くのと、一緒かもしれないと思われがちですが、そうじゃなく宣言して言葉にすることによって、ある種のコミュニティが生まれているわけで、私はこの人のために生きるというような相手が生まれている気がするのです。
- 関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO そうですね。
- 高森主任研究員 そういう意味では、防災を言葉にした人と言葉にした人が明示しているか明示してないかわからないけれど、その相手の人と関係はすごく身近になっているのかもしれないですね。
- 関西大学社会安全学部近藤研究室チームCREDO そうです。
- 高森主任研究員 身近という言葉は本当にみんなが使っている言葉ですが、なかなか誰に身近になってもらいたいのかという方向性が相当違いがあるなと感じていました。ちょっと話を変えてみたいと思うので、関西大学SKHさんの真陽子供放送局では、りゅうき君や新しい子供たちがローカルヒーローじゃないけれど、そういう



人たちが生まれていってますよね。それがもしかしら、身近な感覚というものを持ってようになったのかも知れないですね。どうしてユーチューバー的なものをやろうと思われたのですか、きっかけとかありますか。

○TAGAYASU鈴木さん 折角もやもやを出したいなと言ったのですが、今すごくいいことがたくさん出てきて、今、色をつけるとしたらオレンジとか黄色になりそうで、よかったら結果としてこうなったけど、私自身はこんなところをもやもやしたんだとか、こういった自分だから感じられたことみたいなものも、ちょっと出してもらえたら素敵かなと思って、お願いします。

○高森主任研究員 そうですね。このユーチューバーをやったりとか校内放送、本当に地道な活動ですよ。そういう緩急をつけた、でもすごく継続的な10年位やるといような話も聞いたことがありますけれども、この活動の中で自分自身でこれはやったと思えるところと、まだちょっとここは悩み多き部分としてあるなというのはありますか。

○関西大学社会安全学部近藤研究室チームSKH 小学生の子供と防災に関する放送をつくっていく中で、4月の当初、小学生との関わり方は難しい部分があったので、毎月毎月行くことで小学生との関わり方、防災に関するテーマだけではなく、小学生の普段の日常はどんなことをしているというのから小学生との仲を深めていく中で、ユーチューバーをしてみたいという意見など防災を新たな角度で伝える方法を引き出せてこれたかなと思っています。

○高森主任研究員 もやもやしたことはありませんか。

○TAGAYASU鈴木さん 心配なこととかありますか。

○関西大学社会安全学部近藤研究室チームSKH 次、5年目の活動になるので、この活動が停滞していかないようにするのに、どうしていったらいいのかがすごい課題だなと思っています。

○高森主任研究員 マンネリの話ありましたよね。そのマ

ンネリは肯定的にはなかなか捉えづらいですか。

○関西大学社会安全学部近藤研究室チームSKH 防災力が向上したので停滞しているという意味で捉えたら、多分肯定的にはなるなとはすごい思うのですけれど、さらに上を目指すのに魅力的な活動としてどう進めていくかが課題だと感じています。

○高森主任研究員 なるほど。多分これもマンネリズムであることがよい点と悪い点があって、それは活動者の視点のところも大きいかもしれないですね。ありがとうございます。

後5分位になってしまったので、今回「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」という話の中で伝え方にずっと考えを持ってきた明石高専の渡部君は、今日の話の中で最後の関大さんのからユーチューバーといった例えで、角度を変えて防災を見せるという話がありましたけれど、この中でよりこう伝わる伝え方はどんなふうに考えていますか。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135°（明石高専防災団）4年生チーム渡部 結構、伝わるというのは難しいなと思っていて、例えば一時的には伝わるかもしれませんが、結構人間はすぐ忘れるので、例えば一時的にそのとき震災は怖いなと思ったとしても、そこからその記憶が抜けてしまったら何の意味もないので、記憶に残る伝え方が必要かなと思い、記憶に残すためには二つ方法があって、一つは反復して仲よくなったり、いい意味でのマンネリを起し定着させるのは防災活動において必要だなと思うのと、もう一つは先程のユーチューバーのように何かちょっと新しい楽しいことをして記憶に残すという方法が必要かなと思いました。一つ私たちの活動との共通点として気になったことがあり、それは例えば私たちがその小学生に対して伝えるわけじゃないですか。ただ、そのユーチューバーという子は小学生自身が伝える側にもなっているなというのがありまして、もちろんCREDOも一緒に私たちが伝える側で伝える側も



ほかの人に対して伝える、その語り手になってるなというのがあり、聞いたことをアウトプットすることによってやっぱり定着するかなと思いました。

○高森主任研究員 なるほど。ということは、やっぱり伝える側と受け取る側というのは最初のもよもやのところで、それは災害に遭った人が伝えて遭ってない人に伝えると考えると、それもそうじゃなくってみんなで伝えることも考えて、それを受け取ってまた考えてという共同でやっていくやり方もあるんじゃないかと思われたところですかね。

○国立明石工業高等専門学校D-PRO135°（明石高専防災団）4年生チーム渡部 そうですね。

○高森主任研究員 なるほど。ありがとうございます。簡単にまとめてみたいと思います。今回いろいろ最初もよもやの話をしっかりさせていただいた上で話を進めていきました。本来3時間くらいは必要なことなので、本当にこれから一緒に考えていく時間があればと思っています。大事な点は、舞子高校生徒のみんなが考えてくれている身近に感じる方法として、ふとしたときという言葉がありましたね。これはすごく考え続ける必要が

あります。それは反復をするというやり方だったり、そういったことで得られるということもあるかもしれないのですが、まだそう感じる瞬間が一体どういう方法で不意に思い出すことができるのかは、これからの課題だと思し、研究分野においてもまだまだ研究が進んでいない点ではあります。ということは、防災、災害という非日常のことをいつも、いつも強迫観念のように思い出し続けるのではなくて、ふとしたときに思い出すことができるような形での地域との関わり方、方法との関わり方を考える必要があるのではないかなと思います。そのような中で最後に言ってくださいましたずっと伝える側とそれを聞く側に分けて考えていましたよね。そうではなくて、一緒に伝えて一緒に受け取るという共同で考えていくことが、もしかしたらふと思い出す方法にもなるのかもしれない、このヒントになるのかもしれないと感じました。

本当に大変短い中でこのテーマ全体に対して答えられたかどうかは本当に難しいですが、今後も考え続けていきたいと思いますので、これからも関心を持ってもらえればと思います。

今日は本当にありがとうございました。



【2017年11月3日 プレサロン】





閉会のあいさつ



河田センター長

皆さん、こんにちは。河田でございます。先程の公開サロンでもやもやという状況は一体どういうものかということについて教訓を伝える、あるいはつくるという、いろんな形で皆さんコミットしていただいているのですが、はっきりしているのは防災には正解はないのだということです。皆さんが小学校、中学校で勉強してきたことは全部答えがあることしか勉強していません。ところが防災には答えがないのです。それを自らが努力することでしか被害を少なくすることができないのです。今から23年前に阪神・淡路大震災が起こったときに、そのときの教訓をこれから生かしていかなければいけないと思ったのは、またこんな被害が起こるという確信があったからなのです。その通り16年後に東日本大震災が起きました。そこで生まれた教訓は、ほとんどが阪神・淡路大震災のときに私たちが得た教訓そのものでした。ですから、教訓が生まれてもそれが正解とは限らないという非常に大きな問題を我々は抱えていて、そのことをきちんと理解しないと、これをやれば特効薬になるんだというものがないことなのです。今日、本当に嬉しく思ったのは、私たちがこの「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」を始めたときは中心を担った私たちは、もう40代から50代のおじさんおばさんだったのです。ところが23年経ち現在は、若い人たちに引き継がれていることは本当にありがたいことだと思っています。防災に正解がない以上、自分たちが考える防災とはこうあるべきだというものをやっていたくしかありません。

私は、明後日からアメリカ合衆国に行きます。昨年8月、9月にアメリカ合衆国はハリケーン「ハービー」と「イルマ」で史上最大の2,500億ドル、約30兆円という被害が生まれたのです。ところが、アメリカという国はそんな大きな災害を受けてもびくともしていないのです。日本も東日本大震災、あるいは阪神・淡路大震災など起こって、今の日本の経済はがたがたです。全然所得が上がらない、豊かになっていない、何でこんなに日本は疲弊してしまったのか、だからこそアメリカから学ばなければいけない。3月と5月に学会と国土交通省と内閣府で合同調査団が行くことになっています。そのときに何を調査するかを、今回ワシントンでアメリカ政府の人たちと話をすることになっています。彼らだって正解は持っていないと思うのです。しかし、これからますます大きな被害が起ころうとしている我が国において、阪神・淡路大震災から続けてきた被害をいかにして少なくするかの努力を具体的にどうするかという、答えを見つけることをやらなければならない。それは正解でない可能性があります。だからといって、諦めるわけにはいかないのです。

人と防災未来センターは2002年にできて、今年16年目に入ります。当時の兵庫県、あるいは政府の人たちが、よくぞこの施設をつくっていただいたと思っているのです。なぜかという、社会がどんどん変化すると被害もどんどん変化するということは、私たちが経験したいろんな教訓が、この次の災害に役に立つかどうかというのは全く保証がないのです。そういう意味で、皆様方が議論していただいたことが、今後も続くということが、これからの災害に対して大変重要なスタンスだと考えています。そういう意味で今日ここに集まっていた人たちが、これから自分が考える防災とは何だということを自問自答しながらずっとやもやの状態を続けながら努力していただきたいと思います。決して正解などこの防災にはありません。若いときから疑問を持ってトライしていただけるというのは、この23年前に阪神・淡路大震災を経験した我々にとっては大変ありがたいことであるし、またこれが私たちの財産になっていくのだと考えています。

実は、23年前にこの会議をやることに当たって、将来的にどのように展開するかということは考えていませんでした。しかし、私が一番大切だと思うことは、この会議を運営する人間は各世代ごとにならなければならないということ。若い人たちがもっともっと参加するようにしなければいけないということはずっとその中心に同じ人がい続けますと、組織というもののはどんどん疲弊してしまいます。ですから、新しい考えを持った人たちがどんどん参加しないと、組織というものは全く機能を失うという運命を持っています。その意味でこの「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」から始まって、「災害メモリアルアクションKOBÉ」に繋がるという、その23年の伝統というのが、これからも皆様方の個人個人の防災の問題だけではなく私たちの社会の災害に強い、この方向を根強いものにしていただけたらと考えています。

本当に今日はどうもありがとうございました。

本当に今日はどうもありがとうございました。



集める・伝える・活かす

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2018

KOBÉのことば

参加無料

活動報告会

日時 **2018.1.6 [SAT]**
10:00 → 13:00

会場 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸(1996～2005)」,そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ(2006～2015)」を実践してきました。

2016年からこの先の10年を見据え「KOBÉのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクションKOBÉ」という取組みを開始しました。「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。災害メモリアルアクションKOBÉでは大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などを企画・活動し、「KOBÉのことば」を集めます。そして、そこから何を受けとり・何を伝えていくべきかを考えながら、「KOBÉのことば」を活かす取り組みをします。

主催 : 人と防災未来センター、京都大学防災研究所
企画 : 災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会
後援 : 兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞社神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部

プログラム

司会：松蔭高等学校 放送部

10:00 開会挨拶
災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長
人と防災未来センター震災資料研究主幹
京都大学防災研究所教授 牧 紀男

10:10 活動発表
発表：①兵庫県立舞子高校
②国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°
(明石高専防災団) 3年生チーム
③国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°
(明石高専防災団) 4年生チーム
④神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑤兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」
⑥関西大学社会安全学部 近藤研究室 チームCREDO
⑦関西大学社会安全学部 近藤研究室 チームSKH

**12:05 公開サロン
「伝えたいことが伝わる伝え方とは？」**
ファシリテーター : ひょうご震災記念21世紀研究機構
研究戦略センター 主任研究員
高森 順子
グラフィックファシリテーター: TAGAYASU 鈴木 さよ
サロン参加者 : 参加団体の学生等
(当日参加している方々全員)

12:55 講評・閉会挨拶
災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問
人と防災未来センター長 河田 恵昭

※敬称略



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2018

公開サロンのテーマ：

伝えたいことが伝わる伝え方とは？

私たち学生は自分たちの活動を身近に感じてもらいたいと日々その「伝え方」に試行錯誤を繰り返しています。一方で、私たちは被災体験を豊かに語る人、ふとしたときにつぶやく人、直接は語らない人など、様々な人とことばに出会い、その「受け取り方」も考え続けてきました。

今回の公開サロンでは、自分たちの活動について、いかなる方法であれば伝えたいことが伝わるのか、語りや体験学習など、具体的な方法も踏まえながら考えます。それとともに、「伝わった」と手応えが感じられるときはどんなときなのかを共有し、受け手との関係についても考えます。



神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ 「阪神・淡路大震災の教訓って、伝わってる？」



阪神・淡路大震災から23年を迎えます。当ゼミでは、昨年度から、「大震災の教訓って？」という素朴な疑問から、このプロジェクトに参加しました。今年も引き続き、このテーマで取り組みます。まず、「うちの大学生たちの意識は？」と

足元を見つめ直すために、全学600人近くのアンケートを実施、分析しました。現場でのインタビューも実施します。

関西大学 社会安全学部 近藤研究室



チーム CREDO

きっかけはKOBÉです。ご年配の方から、「大津波が来たら、その時はあきらめる」、そんなことばを受け取りました。災害が起きる前に心が折れてしまっているネガティブな状況を変えたい。そこで、前向きなことば(CREDO)を集める活動を始めました。すてきなことばを共有して、みんなのチカラを向上させていきましょう！



チーム SKH

こどもたちのことばで、こどもたちに防災を伝えるプロジェクト、それが「真陽こども放送局(SKH)」です。活用するメディアは、お昼休みに親しまれている校内放送。毎週10分という短い時間ですが、思いを込めて伝え続けています。活動を始めて4年度目、ついに通算100回を達成しました！ KOBÉ発の新機軸です。

兵庫県立舞子高校



私たちは、災害は身近に存在するということを伝えるために活動しています。防災を学んでいる私たちは、普段の生活の中で災害を身近に感じることは多くあります。近々発生すると言われている南海トラフ巨大地震に注意が必要です。注意が必要だからこそ災害はいつも身近にあるということを発信していきます。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°(明石高専防災団)



3年生チーム

私たちD-PRO135°二期生は、兵庫県明石市東二見で防災街づくりのサポートをしています。瀬戸内海に面した東二見では、南海トラフ地震の際、最大2mの津波が予想され、2017年の台風第21号で高波による浸水もありました。このような問題点をヒアリングなどを通して、地域の方と共に考えていく活動をしています。



4年生チーム

私たちD-PRO135°一期生は、未災者である子供たちの防災意識を向上すべく、防災ゲームを広めてきました。そして今年度は新たに、自分たちと同世代の神戸高専の学生に対して、防災の授業を行いました。授業は、避難所運営をテーマとしたゲームを元に行われ、被災者の方々の体験談もゲームに反映されました。

兵庫県立大学「ほっとKOBÉ」



ほっとKOBÉは、復興公営住宅が建ち並ぶHAT神戸灘の浜団地において、地域コミュニティ形成支援を目的として活動を行っています。団地では、お互いの顔や名前を知らないという住民も多く、人と人とのつながりが薄いことが問題となっています。そこで、小さい子どもから高齢者まで、幅広い世代の誰もが気軽に集え、「ほっと」できる場所を提供し、世代間の橋渡しをする役割を担っています。

お問い合わせ：

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課
〒651-0073 神戸市中央区船浜海岸通1丁目5-2 西館6階
Tel : 078-262-5060 Fax : 078-262-5082
Email : hitobou-fukyuu@fri.ne.jp
HP : http://www.fri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究(平成29年度一般研究集会29K-09)の成果によるものです。

災害メモリアルアクションK0BE企画委員会名簿

【企画委員】

※委員は氏名五十音順

役 職	氏 名	所 属
企画委員長	牧 紀男	京都大学防災研究所
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会
	太田 敏一	防災科学技術研究所客員研究員
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	奥村与志弘	関西大学社会安全学部
	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	河田のどか	(特非)さくらネット
	近藤 誠司	関西大学社会安全学部
	高森 順子	大阪大学大学院、阪神大震災を記録し続ける会
	中野 元太	京都大学情報学研究科博士後期課程
	西口 正史	ラジオ関西報道制作部 記者
	福岡 龍史	エフエム・プランニング
	宮本 匠	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	安富 信	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	横山 愛子	株式会社GK京都
和田 茂	兵庫県立舞子高等学校	

【サポーター】

	越山 健治	関西大学社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	佐藤 敬	国土交通省近畿地方整備局神戸港湾事務所
	馬場美智子	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	細川 顕司	(公財)市民防災研究所
	松元 正博	NPO法人『人・家・街 安全支援機構』
	矢守 克也	京都大学防災研究所

【顧問】

	河田 恵昭	人と防災未来センター、関西大学
	土岐 憲三	立命館大学
	新野幸次郎	神戸都市問題研究所
	林 春男	防災科学技術研究所

災害メモリアルアクションKOBÉ2018参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏名	所属
兵庫県立舞子高等学校	大坪 直人	兵庫県立舞子高等学校
	松本 美砂	兵庫県立舞子高等学校
	三井 唯菜	兵庫県立舞子高等学校
	加藤 昌也	兵庫県立舞子高等学校
	住田 萌栗	兵庫県立舞子高等学校
	住吉 悠	兵庫県立舞子高等学校
	西尾ことり	兵庫県立舞子高等学校
	信川 亮太	兵庫県立舞子高等学校
	大塚 美紗	兵庫県立舞子高等学校
	立野 貴大	兵庫県立舞子高等学校
	中谷 海	兵庫県立舞子高等学校
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135° (明石高専防災団) 3年生チーム	竹谷 夏葵	国立明石工業高等専門学校
	松田 もも	国立明石工業高等専門学校
	樹下 晴香	国立明石工業高等専門学校
	北尾 匠	国立明石工業高等専門学校
	多胡 旭	国立明石工業高等専門学校
	谷郷 風人	国立明石工業高等専門学校
国立明石工業高等専門学校 D-PR0135° (明石高専防災団) 4年生チーム	河内山悠介	国立明石工業高等専門学校
	渡部桂太郎	国立明石工業高等専門学校
	東條 翔	国立明石工業高等専門学校
	松尾 彰太	国立明石工業高等専門学校
	多田 裕亮	国立明石工業高等専門学校
	菅 智子	国立明石工業高等専門学校
	松家 雅大	国立明石工業高等専門学校
	神足 美友	国立明石工業高等専門学校
	松本 拓実	国立明石工業高等専門学校
	村岡 荘志	国立明石工業高等専門学校
	篠原 達也	国立明石工業高等専門学校
	木村 真悠	国立明石工業高等専門学校
	中谷実穂子	国立明石工業高等専門学校
今井 美佑	国立明石工業高等専門学校	
神戸学院大学現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	向田 健司	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	和田 貴士	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	菅原 由衣	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	富岡 美祈	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	塚本真央子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	山村 勇貴	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	大家 元希	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	井上 太賀	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	南木 颯人	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	仲上 芽花	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	長井 裕貴	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	寺井 美紀	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	林 修功	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	川口 祐生	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	東 萌菜美	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	森脇 稔喜	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科

グループ名	氏名	所属
神戸学院大学現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	森 達也	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	巽 翔	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	岡崎琳太郎	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	寺尾 莉子	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	池内麻菜美	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	土居 大輝	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
	池上ひなの	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科
兵庫県立大学 「ほっとKOBE」	一之瀬美希	兵庫県立大学
	小谷 美尋	兵庫県立大学
	松原 誠	兵庫県立大学
	住友 愛花	兵庫県立大学
	嶺 佳太郎	兵庫県立大学
	細岡 新菜	兵庫県立大学
関西大学社会安全学部 近藤研究室 チームCREDO	芥田 慶祐	関西大学社会安全学部
	片岡 剛	関西大学社会安全学部
	吉田 周平	関西大学社会安全学部
	押井 菜摘	関西大学社会安全学部
	吉満 楓	関西大学社会安全学部
	尾山 諒太	関西大学社会安全学部
	安田 結吏	関西大学社会安全学部
	前田 和輝	関西大学社会安全学部
	小溝恵里佳	関西大学社会安全学部
	植竹 遥	関西大学社会安全学部
	阪本 優満	関西大学社会安全学部
	志 幸奈	関西大学社会安全学部
	長谷川奈々	関西大学社会安全学部
	林 侑輝	関西大学社会安全学部
	高橋 良知	関西大学社会安全学部
	乾川敬一朗	関西大学社会安全学部
	松山 奈月	関西大学社会安全学部
	関西大学社会安全学部 近藤研究室 チームSKH	志水麻佑子
清水 洋希		関西大学社会安全学部
藤原 匠平		関西大学社会安全学部
林 亮佑		関西大学社会安全学部
汐瀬 拓馬		関西大学社会安全学部
大西 景子		関西大学社会安全学部
広渡 稚菜		関西大学社会安全学部
中村 理乃		関西大学社会安全学部
石井 里奈		関西大学社会安全学部
谷内 昭洋		関西大学社会安全学部
奥井 柚子		関西大学社会安全学部
井上 真菜		関西大学社会安全学部
白永葉瑠香		関西大学社会安全学部
小森 翔太		関西大学社会安全学部
上畑 直人	関西大学社会安全学部	
司 会	磯見 京香	松蔭高等学校2年
	田中 ゆき	松蔭高等学校1年

発表風景・交流会等







災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION

平成29年度 災害メモリアルアクションKOBÉ 報告書

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
京都大学防災研究所

企 画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel：078-262-5060 Fax：078-262-5082

http://www.dri.ne.jp/memorial_action_kobe

本研究は京都大学防災研究所共同研究(平成29年度一般研究集会29K-09)の成果によるものです。